

対照表一

長春包囲およびカ子を中心とした構成要素に関わる類似性。
 「視点をとくに據え、何に着眼して何を素材として取り上げ、如何なる状況を描いたか」という構成要素を、その要素を構成する表現に基づいて対比させ、他のカ子経験者の記録にはなく原告と被告の著作物のみにある共通着眼点とそれを支える表現を中心として列挙する。出現順序は、『大地の子』に準拠する。

番号	原告の著作物「カ子 出口なき大地」、『不条理のかなた』(いずれも読売新聞社刊の四六判単行本から引用)、『不条理のかなた』の引用のみ『不条理』と撰記。	備考
1	<p>城内とは、昔、「匪賊」から守るための城壁があったところで、中国人ばかりが住む、いわゆる中国人街である。新京時代には、漢人街と呼ばれていた。(略)女子供だけで立ち入ることは危ないとされてきたが、(略)興安大路の道幅の四分の一くらいしかない狭い道路には、馬車がのろのろとしか走れないほど人が溢れ出て、その両側には派手な彩りの招牌(看板用の垂幕)が垂れ下がる、にぎやかな商店街が続いていた。油と肉とニンニクをこつたまぜにして小麦粉で固めたようなにおいと、かびついた古本のようなにおいがたちこめていた。 (一一六頁三行〜十四行)</p>	<p>①城内に着眼 ②城内の定義(中国人街、日本支配時代(新京時代)) ③油と肉とニンニクの匂い ④道幅の狭さ ⑤雑踏 ⑥賑やかな店が続く ⑦弱者だけが危険であることを示唆。</p>
2	<p>この搬送で私の家にいた避難民の人たちはみんな引き揚げて行った。(略)</p>	<p>日本人が引き揚げた空き家</p>
	<p>日本人街まで荷車を曳いて行くのは大へんだったが、頼みにしていた家々は「櫻札」が残っているだけ</p>	

<p>主がいなくなり、まるで魂を失ったような空き家には、日本名の名札だけがポツンと取り残されていた。 (七十二頁九行) 終わりから二行)</p>	<p>街路樹の根元には倒れた人がそのまま放置されていた。(一二七頁 終わりから二行) 一行)</p>	<p>そんな城内の中国人たちには、おそらく土着の生命力のような特殊な感覚があるのだろう。城内へ行けば、そのころめったにお目にかかることのない大豆や高粱をほんの一握りではあったが、それでも手に入れることができた。 (一一六最終行) 一一七頁二行)</p>	<p>5 長春の飛行場が八路軍に押えられてしまったからである。だから国民党軍の食糧もそれほど豊かではなくなっていた。毎日のように落下傘が補給物資を落としていくが、それも着地したときにはほとんどが破裂している。市街ぎりぎりのところまで八路軍に包囲されているから、国民党の飛行機は長春の上空に近づけない。低空飛行すると必ず八路軍に撃ち落とされる。だからそう頻繁には飛来できない。そのため力のバランスも計算せず、一度にやたら重すぎる量を吊り下げるのか、落下傘なのにシューッ! と勢いよく空気を切って落ち、着地したときには破裂し</p>
<p>けで、人の気配はない。 (八八頁十七行) 十八行) 陸徳志一人が車を曳いた。空家に標札が残っているだけで、人の気配はない。(「文藝春秋」八七年七月号、四二〇頁、下段九行。空家は単行本でカット)</p>	<p>道端の街路樹にもたれた標札の死人もいた。(九九頁二行) 三行)</p>	<p>永春路の市場は、どこから物資が流れて来るのか、食べものの屋台が並び、豚肉や野菜をいためる油やニンニク、唐辛子の匂いが、一心の唾液をそそった。 (九九頁六行) 七行)</p>	<p>それから間もなく、兵糧攻めに逼っている国府軍に対して、藩陽から飛行機で、食糧の投下がはじまった。ブーンという飛行音を聞きつけると、誰もが外へ出て、機影を探した。 青い空に銀色の編隊が見え、尾翼に国府軍の旗を記した飛行機が、低空飛行で兵舎の上へ飛来し、麻袋に詰めた米を投下した。民衆は、指をくわえて見ているだけだった。だが、長春市を包囲している八路軍から攻撃されはじめると、パラシュートによる投下に変った。 「あっ、飛行機だ!」 終日、家の中で体を動かさぬよ</p>
<p>に、標札のみが残っている状況。主がいなく人の気配がない。</p>	<p>街路樹の根元と死人の位置関係</p>	<p>なぜかわからないが、城内には普通では手には入らないような食料物資がある。</p>	<p>食糧の空中投下の話を次の構成要素で描写。 ・飛行機の飛来を擬音語によって表現。 ・飛散した米を拾うため群衆が群がる様子を「わーっ」と</p>

<p>てしまうのである。しかも、あまりに上空から落とすためか、ねらいをつけた場所に落ちることはま ずない。ところがこの落下物資の 下敷きになったら死んでしまうし 、屋根の上に落ちたりしたら屋根 に穴があく。だから飛行機の音が するとみな縮み上がった。 シューッ！という落下傘の音を 確かめると、銃を持った国民党軍 が飛散した白米等を拾い集めに來 る。市民はその光景を恨めしそ うに見ているしかない。一歩でも近 づいたら射殺されるのである。時 には同じ国民党軍同士が奪い合 いをすることもある。長春にはい んな種類の国民党軍が集結してい て、指揮系統の違いや出身地方の 違いなどがあつたらしく、食糧が 不足してくると、それらの間の相 克がむき出しになつてきていた。 米を拾い終つて国民党軍が引き 揚げると、遠巻きに見ていた群衆 が地面にわずかに残っている拾 残しの米粒めがけて、わーっと殺 到した。たとえ一粒でも二粒でも 、何も無いよりはいい。(一一四 頁九行〜一一五頁六行目)</p>	<p>うにしている一心も、この時は、 箒を持って外へ飛び出した。 青い空に幾つかの白いパラシュ ートが開き、風に流されながら、 うまく国府軍の上に落ちる場合も あるが、時々、民家の方にふわふ わと流れ、胡同の屋根や道に落ち ると、兵隊が駆けつける前に、わ っと人が群り、一掴みでも多く取 ろうと争った。一心はその間隙を 縫って機敏にもぐり込み、箒でさ っとはき寄せて、素早く家へ持ち 帰った。欲を出して、うろろうして いると、駆けつけた兵隊たちに発 砲されるのだった。 (一〇二頁一行〜一二行目)</p>	<p>いう言葉 で表現。 ・群衆は 恨めし そうに見 るだけ。 ・国民党 軍に発 砲される から。 ・屋根を 用いて 表現。 ・一粒で も多く 拾おうと する。</p>
<p>6 誰も、一日でも長く生き延びよ うと必死だった。そのためにはな んでもした(一一五頁六〜七行) 何も食べる物が無くなると、レ ンガのような形に固めた、高粱酒 をとったあとの糟を焼いて食べた 。(一一八頁三〜四行) 餓死寸前の長春の市民はみなぞ ろぞろと這い出して来ては雑草を 摘んだ。誰も彼もみんな命がけだ った。(略)雑草がなくなると、</p>	<p>陸徳志も、淑琴も、取りに出かけ るが、殆んど素手で掃って来る場 合が多い。その代り、夫婦は棧の 葉や食べられる野草を探しに行き 、高粱酒の搾り滓に棧の葉や野草 を混ぜて、ふかし饅頭にして一家 の命を承らえた。 (一〇二頁十二行〜十四行目)</p>	<p>誰もか命 を承らえ るために 何でもす る状況。 何もなく なると、 雑草 棧の葉 高粱酒の</p>

<p>1 0</p> <p>「長春を……脱出しよう」 (一三四頁六行)</p>	<p>9</p> <p>食べる物が何も無くなった。せめて少しでも体力を消耗しないよう、じつと横になっているしかない。私たちはワニのように身動き一つせず夜が来るのを待った。 (一二三頁七行〜九行)</p> <p>声を出すと体力を消耗する。でも、せめて生きていくことの証がほしい。誰からともなく、歌いだした。(略) 歌い終えて死ぬのかもしれない。明日という日はもう来ないのかもしれない。(略) 歌わなかったら、私たちはもう、人間でいられないような気がした。 (一二三頁三行〜最終行)</p>	<p>8</p> <p>二階の窓から見下ろす興安大路は「死の街」と化していた。もう夏も盛りだというのに、あの豊かな街路樹の葉は食べ尽くされて一枚もなく、まるで死んだような街路がどこまでも続いており、 (一二七頁終わりから三行〜二行)</p>	<p>7</p> <p>手伸ばすと腕が痛んだ。だから私は、低く垂れ下がった楡の枝を選んだ。(一二二頁十三〜十四行)</p> <p>やがて楡の葉も芽吹くことに頼まれて無くなり、私たちは楡の木の樹皮をしやぶるようになった。 (一二三頁三行)</p>
<p>「私たちが、体力の残っているうちに、ここを脱出して范家屯へ行</p>	<p>空からの食糧投下のない日が多くなり、一日中、水だけの生活になった。畑の上で寝たきりで、三人が交互に声をかけ合って、起きないと、そのまま死んでしまいうであった。 (一〇一頁十八行〜十九行)</p>	<p>日子し煉瓦の壁だけが残った家が多くなり、荒涼とした「死の町」のようであった。 (一〇一頁十六行〜十七行)</p> <p>胡同全体がしんと静まり、夏の太陽だけがじりじりと、土壁の家を焼いた。(一〇一頁終わりから二行)</p>	<p>街路樹の手の届く限りの葉はむしり尽され、幹の皮をはいで汁を吸い、 (月刊誌八七年七月号四二八頁上段十〜十一行、単行本ではカット)</p>
<p>長春脱出を会話で</p>	<p>・食べる物がなくなつたので、横になつてい る。 ・声を出して励まし合い、生きてい る証を求めようと する。 ・そうし ないと人 間でなくな る。</p>	<p>「死の街」(町) ・荒涼とした無気味な静けさ ・夏の盛りなのに</p>	<p>糟(滓)を食べる 手の届く範囲内の楡の葉を摘む。 次に樹皮をしやぶる。</p>

	<p>くことだな」 (一〇二頁終わりから六行)</p>	<p>口に出して言う。</p>
<p>1 1 母はもともと留用などされたくはなかった。(略)長春から脱れて日本に帰りたいか、たのである(略)。「やっぱりどんなに頑張っても、あのとき日本に帰れば良かったと思いますわ。今となってはせめて約束どおり、南京へ連れて行ってもらいましょよ」(略) 長春市長は(略) 「いざとなったらかならず飛行機で南京へ連れてゆくから」と約束して母に日本帰国をあきらめさせていた。 「いや、もう少し待とう。そのうち八路が入ってくるじやろう。わしは八路の隊長と約束しておる。ここで彼を待ちたい」(一〇三頁後から六行〜一〇四頁八行) 南京移住の指令が父に届いていた。この指令を受けて長春市長はさっそく南京に飛び、(略)ところが(略)市長は長春に戻れなくなってしまった。(一三五頁一〜四行)</p>	<p>「やっと、決めて下さいましたか」 淑琴が安堵するように云った。 (一〇二頁終わりから四、五行)</p>	<p>父親がなかなか脱出を決心せず、母親は早く長春を出たがっている。 原告の母の人物像と一心の養母の人物像は他の場所でも一致。</p>
<p>1 2 父は長春市長に強制留用を解いてくれるように頼みに行った。(略)「どうしてこんなになられるまで我慢なさったのですか……」約束を果たさなくて申し訳ないと市長は詫言、父に多額の餞別を手渡し、さらに白米、高粱、大豆、それからクルミや松の実などに入った軍用の携帯食まで添えてくれた。思いがけず、収入であった。(一三四後から三行〜一三五頁後から二行)</p>	<p>「だが、問題は范家屯へ辿り着くまでの食糧だ」 徳志は呻くように嘆息した。 「それなら、以前から準備してあります」 淑琴が云った。 「えっ？このところ殆んどものを食べていないのに、どうしてそんな用意が……」 (一〇三頁一〜五行)</p>	<p>長春を脱出する寸前に、思いもかけず、突然食糧がある状況。</p>

<p>1 3</p> <p>そうと決まればともかく体力をつけよう。私たちは久しぶりに高粱のご飯を食べた。 (一三七頁二行)</p>	<p>「それは有難い、一心に少し食べさせよう、ずっとひもじかったらうから」 (一〇三頁八行)</p>	<p>まず子供にその食糧を与えようとする。</p>
<p>1 4</p> <p>解放区……その意味はよくわからないが、カイホウク。というその音が、父の言う餡ころ餅と結びついて、食糧の豊富な別天地のように思われる。 (一四二頁、五〇六行)</p>	<p>「卡子って、何のこと？」 一心は聞きながら、胃袋がぎゅっと鳴った。 (一〇三頁十行〜十一行)</p>	<p>子供が、共産党側の領域の定義の意味が判らない様子。食べ物を連想。</p>
<p>1 5</p> <p>八路军が長春を包囲している環の一角に、「卡子」と呼ばれていた関所のような構があり、その構を境として内側が国民党軍、外側が共産党軍の支配区域となっている。「不条理」一〇四頁、後から九行〜八行) 卡とは人が番をして狭い口をふさぐという意味で、卡子は関所のよきな役割を果たす。 (一四〇頁十一〜十二行)</p>	<p>「孔子さまの時代から軍隊が守る重要な関所のことを卡子と云ったが、今は国府軍と八路军と、それぞれ通行者を検問する関所のことだよ」(一〇三頁十二行〜十三行)</p>	<p>同じ関所という言葉で定義</p>
<p>1 6</p> <p>「あの門は、一週間に一回か、ひどいときには一か月に一回ぐらいしか開けてくれないんですよ。四、五日前に開いたばかりでねえ(略)」 (一五三頁三〜五行)</p> <p>(原告等は四日間)</p>	<p>「(略)八路军の方は受入れの数を調整して、なかなか門を開けず、両軍の間の真空地帯には人がたまっていくらしい、だが、春節や、仲秋節には開くことが多いと聞いている」 「じゃあ、この八月十七日の仲秋節には——」 「そう信じて、ここは賭けてみよう、真空地帯で、五日間ほど待機して脱出の順番を待とう、そのためには明日、出発することだ」 (一〇三頁終わりから六〜二行)</p>	<p>原告等は卡子内に四日間いた。仲秋節に開くと考えているのならば何なる目的で五日も前に行くのか。順番とは</p>

1 7	<p>もう夏も盛りだというのに、あの豊かな街路樹の葉は食べ尽くされて一枚もなく、まるで死んだような街路がどこまでも続いており、(一二七頁後から三行〜二行)</p>	<p>夏の陽ざしがきらつく長春の町は、不気味なほど静まり返っていた。(一〇五頁一行)</p>	<p>夏の盛りと、死の街のような不気味な様子。</p>
1 8	<p>私たちは長春を南へ南へと歩いていった。(一二九頁後から二行〜一行)</p>	<p>そんな荒涼とした町を、陸一心は、陸徳志夫婦の後に随いて、南の方向へ力なく歩いていった。(一〇五頁四行)</p>	<p>住んでい る場所が 異なるの に、同じ 南の方向</p>
1 9	<p>いくらこの二、三日食べる物があつたとは言え、骨と皮ばかりになつている事には変わりはない。歩くというのは大変な仕事であった。(一四〇頁十三行〜十四行)</p>	<p>栄養失調で瘦せ細った体に、荷物が重くのしかかり、歩くだけで精一杯だが、(一〇五頁八行)</p>	<p>栄養失調 で弱った 体と歩く 大変さ</p>
2 0	<p>私はふと母の話を思い出した。(一四三頁四行) (略) 「(略) 私たち中国人はね、何千年もの昔から、この土地で戦争をしてきた。そのたびにいつも民衆が巻き添えをくった(略)」(略) 「これぐらいの気持がなきゃ、中国では生き残ってはいけないんだよ。あんたたち日本人は戦争の負け方というものを知らないんじゃないのかね。日本は今まで負けたことがないんだろ。自分の土地で戦争に巻き込まれたこともないんだろ。中国じゃあね、負け方を知らない人間は死ぬんだよ(略)」(一四四頁一行〜十行)</p>	<p>「いいか、一心、中国では戦乱の度に民は逃げ惑わねばならんが、平時になればまた、元に戻って暮せるのだ、目先の物事に固執せず、長い目でものを見なくては、日本へ帰ることが出来なくなるぞ」(一〇六頁最終行から一〇七頁二行)</p>	<p>卡子の前で突然、戦乱の世を生き抜く中国人の知恵の話。戦時の生き方を知らないと希望のある状態が来ないことを説教する。</p>
2 1	<p>長春市街の南西、洪熙街にある、卡子、という所を通らなければならぬ。(一四〇頁九〜十行)</p>	<p>市の南西のはずれ、洪熙街まで来ると、陸一家のように家財道具一式を天秤棒や背中に担いだ使</p>	<p>・心許ない足取りの人の列</p>

<p>気がつくといつの間にか一つの長い列ができていた。卡子目指して長春を脱出する難民たちであろう。餓死寸前の足は皆一様に重い。</p> <p>（「不条理」一〇五頁七行〜八行）</p>	<p>細った人の列が、陽炎のように揺れながら続いていった。瀋陽方向へ脱出するには、この道を歩いて出るしかない。</p> <p>（一〇七頁四行〜六行）</p>	<p>・南西の方向の洪熙街 ・そこを通るしかないことに着眼</p>
<p>気がつくとも難民が通る道の両脇は、鉄条網で挟まれていた。</p> <p>（一四七頁後から四行〜三行）</p>	<p>やがて道の両側に高さ一メートルほどの鉄条網が張られ、</p> <p>（一〇七頁六行〜七行）</p>	<p>やがて道の両側鉄条網</p>
<p>坂を下りかけると、そこはもう卡子だった。</p> <p>（一四二頁後から四行）</p>	<p>通行者を検問しているところに出た。そこが卡子であった。</p> <p>（一〇七頁七〜八行）</p>	<p>「そこが卡子だった」という同様のトーン。</p>
<p>林の右手から数人の兵隊が出て来た。なんと国民党軍である。また荷物を検査された。検査すると言っではめぼしい物を奪った。（略）何か金目の物でも思ったのであろうか、</p> <p>（一四九頁九行〜十四行）</p>	<p>地面に荷物を広げると、二人の兵隊は金目のものを物色するような目付きで検査したが、めぼしい物がない。</p> <p>（一〇七頁最終行から一〇八頁一行）</p>	<p>・複数の兵隊 ・検査 ・めぼしい物 ・金目の物</p>
<p>「チョウシュントウタ？（長春はどうだ？）」（二行略）</p> <p>「食糧難で餓死者が続出しています。私たち日本人九十名は、餓死から逃れるために長春を出て参りました」（略）</p> <p>「ふーん、じゃあ、あっちへ進め」</p> <p>（一四九頁後から二行〜一五〇頁五行）</p>	<p>「長春市から出ていく理由を云え」（一行略）</p> <p>「もう食べる物がなく、このままでは餓死してしまからです」（略）</p> <p>「よし、出ていい」</p> <p>（一〇八頁四行〜一〇九頁二行）</p>	<p>兵隊に長春に関して聞かれ、食糧難でこのままでは餓死する旨答える。進む方向の許可。</p>
<p>◆、ひとたびこの欄を越えたら、絶対に二度と引き返すことは許さない、という、きつい条件がつい</p>	<p>「ここを出ると二度と長春には戻れないぞ」と念押しした言葉が、重苦しく残った。</p>	<p>・二度と長春に戻れないを</p>

<p>ていた(一四七頁十二、十三行) ◆(欄門を潜ったら二度と長春には戻れないことを国民党兵士に告げられたという描写の後に) [妙に] 静かである。しかもなぜか穏やかな静けさではない。(略)しばらく道を進んで行くと前方でどよめきが起った。(「不条理」一〇七頁後から八行、九行)</p>	<p>漠然とした不安感は、しばらく進んでから現実のものとなった。(一〇九頁六、八行) 但し [妙に] だけは「文藝春秋」八七年八月号四一七頁下段一行にあり、単行本出版の時にカットされている。</p>	<p>括弧書き ・ [妙に] 感 じる ・ 漠然と した不安 感がしば らくする と現実と なる。</p>
<p>2 7 先ほど父は、八路の隊長が残した布片を持って、欄門にいる朝鮮人の八路に、出門の許可をくれるよう、交渉に行ったらしい。(「不条理」二六一頁一、二行)</p>	<p>陸徳志は不安をおし隠し、 「八路軍の卡子の近くまで行って、欄門の様子を探ってくる、(略)」 「(一〇九頁九行、十一行)」</p>	<p>父親が八路側の卡子の門まで出門(開門)確認に行く。</p>
<p>2 8 「お父さん、ここはどこなの?」 「国民党と八路軍の中間地帯じゃ。卡子は欄が二重になっておるようじゃ。あっちにあるのが解放区の出口じゃ」 見れば右側の鉄道線路に垂直に、昨日の夕方越えたのと同じような鉄条網の欄が張りめぐらされており、その欄には大きな欄門が施してある。これが解放区への出口らしい。(一五二頁十二行、十六行)</p>	<p>「向うの卡子までせいせい二里(一キロ)ぐらいと聞いているから、じきに戻る、ほら、ここからでも向うの様子が見えるだろう」と指した。 (一〇九頁十六行、十八行) 「(略)見えるだろう」と遠くを指した。 (「文藝春秋」八七年八月四一七頁下段十三行。遠くは単行本ではカット)</p>	<p>解放区への出口を指して、父親が説明する。 陸家は近くにいないが、近くにいた原告等と類似の会話設定。</p>
<p>2 9 解放区……その意味はよくわからないが、カイホウクというその音が父の言う餡ころ餅と結びついて、食糧の豊富な別天地のように思われる。草一本生えてない長春と違って、きつと緑豊かで花が咲き乱れ、その上に陽の光が降り注ぎ、小鳥が舞い踊っているにちがいない。(一四一頁五、七行) もちろん鉄条網の向こうの解放</p>	<p>真空地帯の向うは、緑の田畑が地平線まで続き、いかにも解放区らしい明るさが感じ取られた。 (一〇九頁後から四、三行)</p>	<p>解放区が緑豊かで明るいと感じる。</p>

<p>区には草が生い繁っている。 (一五三頁十一行)</p>	<p>3 0</p> <p>「お父さん、あの門は開けてもらえないの？」(一五三頁最終行) 「お父さん、お父さんは八路軍の人たちはいいい人たちだって言ったでしょ？」 「そうよのう」 「じゃあ、どうしてその人たちが、こんなひどいことをするの？あの人たち、ほんとうに八路軍なんでしょ？」 「八路軍じゃ、朝鮮人の八路じゃ」 「じゃあ、どうして、あの門を開けてくれないの？」(略)」 (一六〇頁十一行〜後から三行)</p>	<p>「あんな近くに解放区があるのに、なぜ、八路軍はすぐ通してくれないの」 一心は、不思議だった。 (一〇九頁後から二行〜最終行)</p>	<p>子供心に なぜ八路軍があ の門を開 てくれな いのかと 疑問に思 う。 訴状、対 照表三の 起承転結 の結の部 分。</p>
<p>3 1</p> <p>新入りの難民の影が見えた。すると、どうしたことだろう。あちらの地面も、こちらの地面も、もこもこっと黒く盛り上がって来た。今まで横になっていた人たちが立ち上がったのである。 手に手に枯れ枝や棒切れなどを持っている。うおーっという獣のような太い声をあげながら、黒い大群はまたたく間に新入りの難民を取り囲んだ。唸り声が、けたたましい喧噪に変わったその一瞬ののち、黒い大群は潮が引くように、すーっともとの位置に戻って行った。まるで何事もなかったかのような静けさの中に、(一五七頁十二行〜後から二行)</p>	<p>徳志が二、三歩行きかけると、どこからともなく骨と皮ばかりの三、四人の男たちが、荷物にとびかかり、麻袋に入った食糧をひったくった。 「ドロボー！返せ！」 一心の叫びに、陸徳志は飛んで来、男たちの肩をひっ掴むと、彼らはよろよろと倒れたが、すぐ別の男が棒切れを持って襲って来た。たちまち麻袋が裂かれ、玉蜀黍や大豆、粟、ニンニクなどが、骨張った手に奪い取られてしまった。 周囲の人々は、この食糧強奪の騒ぎなど無関心に、地面に蹲っている。(一一〇頁四行〜十行) 周囲の人々は、今の食糧強奪の騒ぎなど無関心に、地面に坐り眼をつむっている。(「文藝春秋」八七年八月号四一八頁上段十三行。単行本では書き換えカット)</p>	<p>新入りの 難民を襲 う様。 客観的事 実ではあ るが、描 写や細か な設定は 各自異な るもの。 多少改変 してあっ ても、原 告と被告 のみ共通 性が多い。</p>	

<p>3 2</p> <p>「あきやしませんよ」</p> <p>突然、右隣りにいた人から声がかかった。中年の日本人女性である。</p> <p>「あの門は、一週間に一回か、ひどいときには一か月に一回ぐらいしか開けてくれないんですよ。四、五日前に開いたば、かりでぬえ（略）」（一五三頁一行〜四行）</p>	<p>「そこの人——」</p> <p>か細い声がし、近くに二人の男がいたことに、はじめて気づいた。</p> <p>「わしらはここへ入って五日になるが、</p> <p>（二一〇頁十五行〜十七行）</p>	<p>隣にいる人が突然話しかけてくる。内容は、五日ほど前のカードの出入りに関する話。</p>
<p>3 3</p> <p>「あなたたち、奪われる話ばかりしてるけどね」</p> <p>中年女性の向こうから、太い男の声がした。ひげをぼうぼうに生やした、頬骨の高い男がこちらをふり向いている。目つきが鋭い。日本人がひとかたまりに置かれているのか、この男も日本人だった。</p> <p>「いずれあなたたちも、奪う側に回るんだよ。しかもただ奪うだけじゃない。今に、もっといいものが見られるよ」</p> <p>男は気味悪く、ケツと吐き捨てるように笑い、背中を向けた。</p> <p>（二五九頁一〜七行）</p>	<p>陸徳志が驚くと、</p> <p>「あなたらも人のものを奪わんと生きていけない、ちょうど今日入って来たばかりで体力のあるうちに、沢山、持っていそうな新入りを一緒に寝おうじゃないか」と持ちかけた。</p> <p>「とんでもない、私は教師だ、盗っ人の片棒など拒げん」</p> <p>と拒むと、相手は咳込みながら「ここで教師も、坊主もあるもんか、すぐに思い知るはずだ」</p> <p>嘲るように云った。</p> <p>（二一〇頁後から三行〜二二頁五行）</p>	<p>奪うだけでなく、奪わなければ生きられない話を男がする。非人道的な行為の遂行を、人道的生き方をしている者に持ちかける。それを拒む。</p>
<p>「そこじゃあ、あややって略奪でもする以外、生きていく道はないでしょうが」</p> <p>右後ろの方では、新入りの難民にたいする、もう何回目かの略奪が行われていた。</p> <p>「それとも叔父さん……」</p> <p>なぶるように父の顔をのぞきこみ、「叔父さんも、人肉でも食べますか？」（略）</p> <p>父は口を真一文字に結び、じっと一点を見つめていた。（一六九頁五行〜後から二行）</p>	<p>「そこの人——」</p> <p>薄の向うから、か細い声があり、背中合わせに二人の男がいたことにはじめて気がついた。（略）腹だけだしたげに云い、もう話しかけて来なかったが、</p> <p>（「文藝春秋」一九八七年八月号四一八頁上段後ろから八行〜下段七行。単行本で書き換え）</p>	<p>・新入り</p>

その夜、雨が降った。激しい雨だった。最初は、一番信用のできる飲み水だと言って喜び、母や姉はやかん、鍋などを並べて雨水を受け止めた。が、そのうち雨水はまるで水蓮の蛇口を開けっぱなしにしたように、激しく空から落ちてきた。傘を広げ、ふとんの端を折ったが、地面をさばさば流れる雨水で、ふとんも私たちもびしょぬれになってしまった。夜が白みかけるころになると雨はやみ、浅く埋められた死体が、雨水に土を洗われて、朝もやの中に浮かびあがってきた。(一七五頁終わりから六行目〜二行目)

…なんとか死体の少なそうなところを見定めてしゃがむと、おしりに固いものが触れた。はっとしてふり向くと、それは地面からによっきり突き出ている枯れ枝のような人の手指であった。思わず前に飛びのいた。

するとそこではカーッと見開いた目が見すえていた。小水で土が洗われて、浅く埋められた死体が地表に顔をのぞかせたらしい。埋められて間がないのだからか。顔にはまだ肉がついており、皮膚は湿った土でしわだらけになっていた。そのしわのひだに、見開いた目に、そして口の中に、土がぎっしり埋まっていた。(一五五頁終わりから二行目〜一五六頁六行目)

やがて黒い雲が垂れ込めたかと思うと、突如、天を引き裂くような稲妻が奔り、雷鳴とともに大粒の雨が地面を叩きつけた。何一つよけるものがない真空地帯では、今にも雷が落ちて来そうであった(月刊誌当該部分書き換え)。
バリバリッ、ピシャーン！ 人々は稗蓐や布団をかぶり、地面に伏せた。

四、五十分もすると、雷雨はやみ、再び明るくなった空から、夏の太陽がもれて来た。

「早々に、ひどい目に遭うな！ 一心、服を脱いで乾かそう、淑琴もだ」

陸徳志が云い、一心が地面に伏した体を起しかけた時、ぬるりとしたものが手に触れた。見ると、眼を見開いた女の死体のくずれた顔に手をつけていた。仰天し、うわっ！ と声を上げた。

「アイヤー！」

淑琴も悲鳴を上げた。雨に流された地面から男の全裸の死体が現れたのだった(一一一頁八行目〜一七行目)

◆「早々、ひどい目に遭うな、一心、服を脱いで乾かそう、淑琴もだ」

陸徳志が二人に呼びかけた。一心が草の間から起き上りかけた時、ぬるりとしたものが手に触れた。何気なく下を見ると、眼を見開いた若い女の死体の顔に手をつけていた。仰天して、うわっ！ と叫ぶと、

「アイヤー！」(月刊「文芸春秋」一九八七年八月号四一八頁下

構成要素
① 激しい雨

② 清潔な飲み水

③ 鍋で受ける

④ 地面に埋められた死体が地表に。

⑤ 見開いた目(眼)

⑥ 体に死体の一部が触れ、初めて死体に気がつき驚く

⑦ 真空地帯の空を何も避けるものがないと感ずる。

⑧ 普段の生活では気にならないうつろい現象が、

避けるも

<p>◆興安大路で私が眺めてきた夕陽は、赤いガラス玉となってからの太陽であった。一日中、陽を遮るものが何もないこんな曠野で太陽の動きをずっと追い続けたのは、これが初めてのことだった。身を隠すよりどころもない、無防備にさらされたこんな空の下で、しだいに赤味を増し、大きくふくらみながら迫ってくるこの夕陽は、なんと無気味で、なんと恐ろしいことか。 (一六一頁後ろから九〇五行目)</p>	<p>3 5 生まれて初めて身近に見た、腐乱した餓死体であった。(一四九頁五行目)</p>	<p>3 6 体が弱ってくる、虫もつく。南京虫や虱の生命力に圧倒されて、そうでなくても少ない血は、吸われるに任せるしかなかった。一日かかってやっと虱を取り尽くしたと思っても、翌朝にはもう、頭皮、脇の下などを中心にびっしり虱に被われ、シャツにも縫い目に沿って虱が列を作っていた。(一一九頁五行目―七行目)</p>	<p>3 7 父は私の背中を撫でてくれた。その掌の温もりで安らぎ、昼間の疲れも手伝って、私は父にしがみついたまま、再び眠りに落ちた。 翌朝目を覚まして(一一五頁終わりから三行目―最終行)</p>
<p>段終わりから八行目―四行目) ◆やがて、俄雨が降り、鍋に受けで、清らかな雨水を飲んだ(月刊「文藝春秋」一九八七年八月号四二二頁下段九行目) ◆(略)大粒の雨が地面を叩きつけた。普段の生活ではそれ程気にならない雷が、よけるものがない真空地帯では、今にも落ちて来そうで、「心は恐ろしさのあまり陸徳志にしがみついた」。(「文藝春秋」一九八七年八月号四一八頁下段十二―十四行。月刊誌の傍線部分、全て単行本でカット)</p>	<p>腐乱した死体に触れたのははじめてで(一一二頁二行目―三行目)</p>	<p>栄養失調の餓んだ体からでも生血を吸い取ろうとする蚊の群を払い、叩き潰すのに疲れた(一一二頁五行目―六行目)</p>	<p>陸夫婦のあたたかい体の間でようやく眠りに落ちた。 翌朝、眼を醒ますと(一一二頁一〇行目―一一行目)</p>
<p>のが何も ない真空 地帯では 子供心に 恐ろしく 感じられ る。 月刊誌で は草むら があり、 若い女の 死体。</p>	<p>弱った体 の生き血 を吸う虫 と、その 駆除の大 突き。</p>	<p>恐怖の中 、親の肌 の温もり でようやく く眠りに 落ち、そ の流れの 中で目(眼) を覚 (醒)ま</p>	<p>恐怖の中 、親の肌 の温もり でようやく く眠りに 落ち、そ の流れの 中で目(眼) を覚 (醒)ま</p>

1	4 0	3 9	3 8
<p>廃墟跡のコンクリートの高い壁の</p>	<p>川底の泥沼が浮き上がってくる程度の浅い川である。(二四四頁一三行目〜一四行目)</p> <p>川底が見えていたかもしれませんがね……その程度の川でしたから(二四六頁九行目)</p> <p>そう言えば川というほどの川じゃないけど、なんだか川底の泥が見えているくらいのものがあったような気もするわね(二四六頁一三行目〜一四行目)</p>	<p>(右隣にいた人が)「ちよとど私はずっと向こうの線路脇の方まで雑草を摘みに行ってたんです」(二五三頁四行目〜五行目)</p> <p>そう言えばこの辺りには、雑草が一本も生えていない。線路沿いに右へ右へと行くと、草が生えているところがあるらしい。(二五三頁一〇行目〜一一行目)</p> <p>「この時長春は、その幅およそ一キロにわたる包囲環により、」</p> <p>(「されど、わが『満州』」一九八三年「文藝春秋」九月特別号、二二六頁、下段九〜十行)</p>	<p>寒くてならない。足の震えが止まらない。(二五一頁二行目)</p> <p>夏というのに、うっすらと朝霜がおり、体が震えるほど、寒かった。(二二二頁一一行目)</p>
<p>異様な悪臭を放つ小山に、気付</p>	<p>ようやく食べられそうな柔かい草を摘み、川底まで五、六センチの浅く淀んだ小川で水を汲み、鍋で煮て食べた。(月刊「文芸春秋」一九八七年八月号四一九頁下段終わりから二行目〜四二〇頁上段一行目。単行本では書き換えカット)。</p> <p>ようやく食べられそうな柔かい草があり、鍋で煮て食べた。(二二二頁一六行目〜一七行目)</p>	<p>周囲の人々はどこから採って来たのか、野草の泥を払い、そのまま食べている。(二二二頁一行目〜二行目)</p> <p>田畑だったところの草は採り尽され、遠くまで行かなければならなかった。長春市内を円形に包囲した幅二キロの環状の真空地帯を行くと、相当遠くまで行ける。ようやく食べられそうな柔かい草があり、鍋で煮て食べた。(二二二頁一四行目〜一七行目)</p> <p>◆…遠くまで行かなければならなかった。真空地帯は幅一キロの包囲環であるから、円周にそえば、相当遠くまで行ける。</p> <p>(「文藝春秋」八七年八月号四一九頁下段十五〜十七行。傍線は単行本書き換え部分)</p>	<p>幅一(二)キロの包囲環にまず着目し、それに沿って遠くまで行けば雑草がある」と描写。</p> <p>月刊誌では原告通り「一キロ」。</p> <p>包囲環も原告通り。単行本書き換え。</p>
<p>死体の山</p>	<p>川底の泥が見える程度の、浅く淀んだ川に注目。</p>	<p>す。</p>	<p>・震える</p>

後ろへ回ると解放区側の卡子きりきりの所に「小高い山」が見える。「不条理のかなた」一一二頁、終わりから四行目〜三行目)

それは——見上げるほどの、死体の山であった。解放区側の照明と月明かりで、死体の一つ一つが鮮やかに浮かびあがっている。(一六五頁二行目〜三行目)

翌朝、八路の兵隊が、大きな樞門の脇にある、小さな通用門からふたり入ってきて、熊手のような物で転がっている死体を掻き集め始めた。昨日のあの山へ「積み上げ」るのだらう。八路はまるで庭掃除でもするかのように、のんびりと死体を掻き集めている。(一六七頁最終行〜一六八頁二行目)

あたりが黒くなるほどのハエの大群である。(略)
ただれて露出した頭の骨、見開かれた目玉、あんぐりと、まるで笑っているように開いている口、その口からむき出しにされた歯……ハエはその口の中にまで入りこんでわんわん音を立てている。洗濯板のように薄い胸は干からびて黒く、大きく半球状に膨れ上がった緑色のおなかが続く。緑色の半球はぶわぶわに腐乱し、表面に白いカビがついている。それもとどこころ崩れて、腸がどろっとはみ出している。ハエはこの半球に集中していた。(一四八頁一行目〜一四九頁三行目)

今まで、あの八路軍が長春を囲んで食糧攻めをしているなんて、信じようとは思わなかった。あれは国民党がとばしているデマだと、

いた。塵埃の山かと、視線を凝らすと、丸太棒のように腐乱死体が積みまれ、蟻が真っ黒にたかっている。解放区のバリケードの近くに死体の山があるのは、卡子が開くのを待ちながら死んで行った死体を、八路軍の兵隊が整理しているように思われた。(一一二頁終わりから四行目〜最終行)

◆「小山に、眼を向けた。異様な悪臭がするからだだった。それは、腐乱死体の山だった。」

死体の山が解放区のバリケードに近い方に、「積み上げ」られているのは、卡子が開くのを待ちながら死んで行った死体を、八路軍の兵隊が整理しているように思われた(月刊「文藝春秋」一九八七年八月号四二〇頁上段二行目〜六行目。単行本書き換え及びカット)

一心は、学校が閉鎖になった日、家へ帰る途中、公園で見た八路軍の十七、八歳の兵士のことを思い出した。

死体を整理する行為に注目

小高い山
小山

積み上げ

人民のために闘っているはずの解放

自分に言い聞かせてきた。でも、今、私の目の前でくり広げられているこの光景は……あの欄門を固く閉じて開けないのは、まちがいなく、八路军である。

八路军は人民のために戦っているのだと、趙さんは言った。人民とは誰のことなのかと尋ねたら、「人民は中国に住んでいるすべての人だ。あなたのお父さんも、中国のために薬を作っている。だから僕たちの仲間だ。あなたのお父さんも、あなたも、人民だ」

趙さんはそう言った。それなのに、あなたたちは今、その人民を殺している。あの門を閉ざしていることで、毎日、これだけ多くの人を、目の前で殺している。長春市街の中で毎日死んでいく人の数も入れたら、もっともっと多くの人を殺していることになる。人が人をこんな風にして殺していいのだろうか。

「お父さん、お父さんは八路军の人たちはいいい人たちだって言っただでしょ？」

「そうよのう」

「じゃあ、どうしてその人たちが、こんなひどいことをするの!? あの人たち、ほんとに八路军なんでしょ？」（一六〇頁一行目〜一四行目）

あの夕陽はもう、私の赤いガラス玉なんかじゃない。趙さんのウソつき。なにが紅旗だ。何が人民の赤い血だ。今、真っ赤に染まっているこのカ子を、あなたはとうとう説明するのだろうか。あの赤い旗の色は、私も一緒に染まって染めたんだと思うといいと言った。そう

国府軍の兵隊に捕えられ、自白すれば助けてやると云われても拒絶し、「毛主席万歳！」と叫んで、銃口で処刑されたのだった。解放区には、若い兵士があのように敬い、信じて死んで行った毛沢東という偉い人がおり、今や八路军と云わず、人民解放軍と称しているのに、どうして解放区のカ子を閉じて、自分たち多くの人民を救ってくれないのか——、一心は不思議で、理解できなかった。（一一三頁二行目〜八行目）

単行本で加筆。

軍が、なぜカ子の門を開けてくれないうのかと、子供を、子供の視点から投げかける。

対照表三の「起承転結」の「結」の部分。

<p>4 7</p> <p>「解放区はまだじゃったのう……。こめんね……」</p>	<p>4 6</p> <p>天には月が冷たく冴え、地には御霊への祈りがおこそかに満ちた。その祈りが呻きのうねりを包み込み、地鳴りを包み込み、死体の山を包み込んだ。</p> <p>「どうか救われてくれ……どうか救われてくれい……」</p> <p>力尽きた父は、死体の山の前にひざまずいて手をつき、肩を震わせて泣いた。</p> <p>肩まで垂れた父の白髪が月光に光っていた。(一六六頁最終行―一六七頁四行目)</p>	<p>4 5</p> <p>◆この頃になると青白く腹せていた私たちの皮膚が老人のように黒くしわだらけになってきた。</p> <p>(一一八頁九行)</p> <p>◆老人のように皺の寄った力の無い顔に(「不条理」一〇二頁一行―二行)</p>	<p>4 4</p> <p>が、止められる人は誰もいなかった。倒れた死体をずるずる運んでいく人がいる。(一五九頁二行目)</p>	<p>4 3</p> <p>地鳴りのような無気味な音に目が覚めた。いや、声なのだろうか。(略)地面を這うその音は、まるで地底からの呻き声のよう</p> <p>(一五一頁八から十一行目)</p>	<p>すれば僕たちは仲間だと言った。いやだ。人民をこんな風にして殺す人たちの旗じゃないか。(一六二頁七行目―一〇行目)</p>
<p>「お前にすまないことをした」 老人のような顔になった陸徳志</p>	<p>月の光だけが神々しく輝いている。</p> <p>「お前にすまないことをした」 老人のような顔になった陸徳志がしんみりと云った。(一一四頁一行目―四行目)</p> <p>「お前にすまないことをした」 陸徳志は髪が伸び、老人のような顔でぼつりと云った。</p> <p>(「文藝春秋」八七年八月号四二〇頁下段三―四行。単行本書き換え)</p>	<p>空腹で眼がかすみ、ますます皮膚がたるんで、十歳の一心の顔にまで皺ができた。(一一三頁最終行―)</p>	<p>ばたばたと行き倒れの死体が増え、幼児の死体は早々と持ち去られた。(一一三頁一八行目―一九行目)</p>	<p>声にならない声を発し、</p> <p>(一一三頁十行)</p>	
<p>父が子に 卡子に入</p>	<p>月の光を 荘嚴なものとして 扱い、言葉 を、老人 の弱りに 切った 様子として 描写</p>	<p>歳に似合 わらず、皺 が出来る 様子に着 目。</p>	<p>死体が持ち 去られる 同一目的 暗示。</p>	<p>声のよう でない声</p>	

<p>1</p> <p>最も少しずつ増やしていった。餓</p>	<p>5 0</p> <p>(略) その氣迫に圧倒されて (一三四頁後ろから七四行)</p>	<p>4 9</p> <p>「両手に食べ物をつかみとり、片手のものを手ばやく口に入れて飲みこみながら、全速力で自分の場所へ戻ろうとしている男が一人いた。おそらくもう片方の手に残る食べ物を自分の家族に分け与えようとしているのだろう。ところが、まわりの難民が、その男の片手に残る食べ物に気がついてしまっただらう。難民が男のあとを追った。男は取られまいとあわてて残る食べ物を口にほおぼったが、そのときにはもうすでに、わっと黒く囲まれていた。(一五八頁一行目〜六行目)</p>	<p>4 8</p> <p>陽が傾きかけて赤味を帯びると、太陽は急激に大きくふくらんでいった。(略) じだいに赤味を増し、大きくふくらみながら迫ってくるこの夕陽は、なんと無気味で、なんと恐ろしいことか。(一六一頁終わりから九五五行目)</p> <p>「明るいあいだは、せめて動いている人の姿が私たちを命ある世になさき、この世ならぬものからいくらかでも救っていた。」 (一六三頁四行目)</p>	<p>(一五一頁〜一三行目〜一四行目)</p> <p>父は私の背中を撫でてくれた。</p>
<p>「さあ、食べよう、一心、急いで</p>	<p>陸徳志の脅しの言葉より、骸骨のよう^{かさを}に瘦せさらばえた異様な姿に後退りし (一一五頁十行)</p>	<p>「よし、あれだ、食糧袋を奪ったらすぐお前に投げるから、淑琴のところへ逃げるんだよ」 「解った、早く！」 (略)</p> <p>陸徳志はかささらい、一心に手渡した途端、他の二、三組が襲いかかった。その間を縫って陸徳志も、一心も、淑琴の元へ戻って来た。(一一五頁四行目〜一四行目)</p>	<p>月光は一段と蒼味を帯び、あの世というものがあるなら、こいう光景なのだろうか(一一四頁、終わりから六七七行目)</p> <p>男の眼は青くらんと光り、月が中天にかかる時刻になると、一層、蒼味を増した。(一一七頁七行目)</p>	<p>(一一四頁三行目〜四行目)</p> <p>がしんみりと云った。</p>
<p>餓死寸前</p>	<p>瘦せすぎていることが却って氣迫を生む様。</p>	<p>難民から奪った食糧を、家族に分けようとす る状況設定。</p>	<p>置き換え この世 あの世 赤味 蒼味 青味</p>	<p>ったことを優しく詫ひる。</p>

<p>5 死寸前の人間がいきなり大量のご飯を食べたりすると、お腹をこわして死ぬか、悪ければ、冷汗を出してショック死のような死に方をするといい。だから父は私たちに厳しくこの食べ方を守らせた。 (一三七頁三行〜五行)</p>	<p>食べてはいかんで、よく噛んで食べよ」 (一一五頁十五行)</p>	<p>の子に、ゆっくり少しづつ食べるよう、子供に注意を与える親の姿。</p>
<p>5 2 しかし……私は生大豆の味を知らなかったのである。青臭い、何とも気持ちの悪い味が口の中一杯に広がって空きっ腹にこたえ、 (「不条理」九二頁終わりから四行〜二行)</p>	<p>大豆の炒り豆は、栄養価が高く、貴重品であった。よく噛むと豆の甘味が口の中に広がった。 (一一五頁終わりから四行)</p>	<p>大豆の味が「口の中に広がった」様子を子供の味覚で。</p>
<p>5 3 が、止められる人は誰もいなかった。倒れた死体をずるずる運んでいく人がいる。ところどころに難民の円陣ができていた。 すき間なく並んだ黒い背中が、すべての光景を隠し、円陣の中で起きている事は、何も見えない。煙が、あちらに一筋、こちらに一筋、細く天まで昇ってゆく。 男が、わかったかというように目つきで、ギラリと振り向いた。 (一五九頁二二行目〜一六行目)</p>	<p>匪賊たちは円陣を組んで、首を斬った死体を丸裸にし、手足を切断し、大鍋に人肉を入れた。白い湯気がたち、人肉の煮える臭いは、周囲の人々の空っぽの胃袋から、げえ、げえと胃液を吐き出させた。 (一一七頁一行目〜三行目)</p>	<p>「円陣」を道具として仮定し、人肉の罪過を暗示する手法。 原告のフイクション。</p>
<p>5 4 ◆そのとき、上へあげかけた私の視線を釘づけにしたものがあった。 それは壁の囲いの隅で、黙々と骨をしゃぶっている、ひとりの男の姿であった。男は倒れた女性に目をグサリと落としたまま、ただひたすらカリカリと音を立てて骨をしゃぶっていた。長い大きな骨だった。肩までほつれてしまったようなぼろぼろの黒い服を着てい</p>	<p>一心は朝から、自分をじいっと見つめている疑ぼうぼうの男に気が付いた。もう食べる草とて一草もなく、食べられるものは一つしかない。匪賊でなくても、互いが互いを窺い合う背筋が硬る気配が漂う月夜だった。 男の眼は青くらんと光り、月が中天にかかる時刻になると、一層、青味を増した。 「あの人、気持ちが悪い——」</p>	<p>「日」を道具として、自分が狙われるという設定をし、詳細に描写。</p>

5 5	<p>た。坐り込んで立てた足のひざから下は服をまもって、靴もはいていなかった。伸びるにまかせた髪の毛とひげがふちどるその顔は、妙に油ぎって、赤ん坊を食べたあとの、あのポチのような目をしてた。</p> <p>もし男の目が私に向けられたら、私はこの男に食い殺される。そんな危機感が電撃のように体を走り、突き飛ばされたように壁を離れた。(一五七頁三行〜一〇行)</p> <p>◆陽はすでに落ち、あたりはもう薄暗い。数知れぬ難民の目が、その目だけが、まるで闇の中の狼のように異様にきらついてこちらを見ている。月明かりで死体の少なそうな所を探してふとんを敷き、急いで腰を下ろした。(一五〇頁終わりから三行〜一五一頁一行)</p> <p>◆こわい！毛が逆立つ。動悸がドッドッと耳を打ち、声を出そうとした。が、声にならない。思わず上体を起こすと、父が目を覚ましていた。とっさに父にしがみついた。(一五二頁二行〜二三行)</p> <p>◆ひげをぼうぼうに生やした、頬骨の高い男がこちらをふり向いている。目つきが鋭い。(一五九頁二行〜三行)</p> <p>◆心臓の音がドッドッと地面を打った。(一六四頁五行)</p> <p>◆陽が傾きかけて赤みを帯びると(略)しだいに赤味を増し、(一六一頁九行〜一二行)</p>	
<p>耐えかねて、一心が云うと、徳志は、</p> <p>「確かにあいつはお前を狙っている、私の傍にいて、眼をそらすんじゃないぞ、眼をそらしたら、取って喰われるぞ」</p> <p>と云った。一心は徳志に身を寄せ、必死にその男を睨み返したが、ともすればその男の眼に吸い寄せられ、喰いつかれそうになる。そのたびに、陸徳志が、一心を庇った。</p> <p>森閑とした夜の闇の中で、男の眼だけがさらに、らんらんと光り、徳志の心臓の鼓動が一心の耳に伝った。(一一七頁四行目〜一五行目)</p>	<p>原告の長年の幻覚からの解放を試みるため、原告自らの感情と思想に基づいて設定したフィクション。</p>	
<p>生きてるか死んでいるかわからないような父の体のどこから出てくるのかと思われるほどの、朗々たる声だった。</p>	<p>陸徳志は、どこにそんな力が残っていたのかと思われるほど、しっかりした声で云った。</p> <p>(一一八頁二行)</p>	<p>弱った体のどこから出るのかと思わ</p>

5 7		5 6	<p>(一六六頁終わりから三二二行)</p>		<p>れるほど 力強い声</p>
<p>八路軍の別の兵隊が横から割り込んで来て、銃剣で私たちの行く先を阻んだ。 全員がたじろいだ。ところが、</p>	<p>「待てーっ！」 八路軍の別の兵隊が横から割り込んで来て、銃剣で私たちの行き先を阻んだ。 全員がたじろいだ。ところが、私たちに垂直に向けられていた銃剣はその向きを変え、M未亡人にまっすぐに突きつけられた。 「お前は出てはならない！ お前の子供もだ」(一七九頁五行目～一八〇頁三行目)</p>	<p>欄門の所で、ひとりひとり名前と続柄が点検された。長春市長が出してくれた留用解除証明書を手を持ち、八路が私たちの名前を一人一人読みあげていった。父の一行でありさえすれば出してもらえる、その事に疑いを持つ者はこのとき誰ひとりいなかった。 「全員、新京製薬関係者なのか？」 朝鮮人の八路が念を押した。 「そうです！間違ひありません。全員、労苦を共にした私の社員、及びその家族です」 父はそう答えながら、一列に並ばされている私たちをズラリと見渡した。 「よしっ！ 出ろ！」 大きな欄門が開かれた。 ——と、その時、</p>	<p>「身分証を示せ」 陸徳志は、経園小学校の身分証をさし示した。 「小学校の教師か——」 「そうです」 「日本人の小学校だった学校か」 「いいえ、ずっと中国人の小学校の教師です」 「よし、通れ！」 遂に生きのびることが出来たのだった。卡子の外へ一歩、足を踏み出した。淑琴はびたりと随いていたが、一心の姿がない。振り返ると、一心は、徳志たちとはぐれ、欄門のところまで兵隊に止められている。 (一一八頁八行目～一七行目)</p>	<p>構成要素 ①門の所で誰何。 ②証明書を手掛かり。 ③肩書きを八路が確認。会話体。 ④「そうです」 ⑤「よし」という 会話体での出門許可。 ⑥遂に門を出ようとする。 ⑦その瞬間阻止される。 ⑧八路軍の門を「欄門」と表現。 原告の特殊な状況がフルコースある、</p>	
<p>「お前の中国語はおかしい、日本人か！」 「中国人、陸徳志の子供です」 「父の職業を云ってみろ」</p>			<p>構成要素 ①留用技術者の家</p>		

私たちに垂直にむけられていた銃剣はその向きを変え、M未亡人にまっすぐに突きつけられた。

「いったい何をやる気だろう。」

「お前は出てはならない！ お前の子供もだ！」

日本語でそう言った。やはり朝鮮人である。この八路は銃剣の先

でM未亡人とその二人の子供を選び分けて、私たちから離れた。私

たちに出門を許可した先ほどの三人の八路より、身分が上らしい。

先ほどの八路は、この命令を黙って聞いている。

「な、なぜですか？なぜなんですか？」

驚いた父は、怒ったように八路に問い詰めた。

「遺族は技術者ではないいっ」

M未亡人の顔から、みるみる血の気が失せた。

「何をおっしゃるんですか？この方のご主人は立派な技術者で、私の製薬会社に貢献してくれました。そのご遺族は私の社員も同様であり、いや、私の家族も同様であります。私には、そのご遺族をお守りしなければならぬ責任があります」

自分の関係者一行でありさえすれば、全員引き連れて行けると解釈していた父は、必死で抵抗した。

「私の家族を出してくれるのですら、どうか、この方たちも一緒に……同じことではないですか……」

「どうか……この方たちは私たち家族と同じなんです」

母も哀願した。白ネズミまでも

「経国小学校の教師です」

陸徳志は、人の流れに逆って、柵門へ駆け寄った。

「その子は、私の子供です、一緒に出して下さい」

「お前の子供が、どうして中国語がおかしいのだ」

「それは……それは子供の時、吃、だったのを、無理に矯正したからです」

「ふうむ、ほんとか、朝鮮人の日本語のできる兵隊を呼んで調べさせるぞ」

徳志は着せめた。

「私の子供です。さあ、一心、早く出るんだ」

荷物を放り出し、両手で一心の手を掴もうとすると、兵隊の銃剣が、徳志と一心とを阻んだ。

「親子三人で、命がけて脱出して来たのですから、どうか一緒に出して下さい」

手を伸ばして、柵門の中へ入りかけると、

「このカ子を通すのは、われわれ軍が定めることだ、お前の意志で、出たり入ったりすることは出来ん、行け！ うしろから出て来るものの邪魔だ！」

先を争って出て来る人の流れの中を、徳志は地面を這って、柵門の下をくぐろうとすると、兵隊が銃口を突きつけた。背後で淑琴の悲鳴が上がった時、上級者らしい男が来た。

「どうした、何か問題が起きたのか」

と云い、兵隊から事情を聞くと、

「あんたの妻の子か、日本人の子か、正直に答えないと、ために

族であるか否かを議論。

②朝鮮人の八路。

日本語話せる。

③顔が汚ざめる。

④銃剣で阻む。

⑤家族なのだから一緒に出してくれ

と懇願。

⑥通門許可決定柵の所在。

⑦地面を這う。

⑧銃の一部を体に向ける。

⑨上級者らしい兵隊が割り込む。

⑩家族同様の者を置いてゆくことは出来ない

と苦悩。

⑪茫然と立ちつくす。

が口を添えた。

八路がいらだち始めた。

「出る気があるのか？ それとも

……」

「ここまで冷然と言って、あとは、

「出ない気かあっ!!」

と一喝し、言うとおりにしないの

なら閉めるぞと言わんばかりに、

開きかけた樞門に手をかけた。

「なんという事じゃ……」

父は怒りに燃える目で、八路を

にらみすえた。どう考えても未亡

人とその子供をこんな卡子に置い

ていくことなどできない。父は八

路の前に土下座した。

「このとおりでございます。どう

かこればかりは寛大なお計らいを

……」

「しつこーいっ!!」

八路は父の顔を蹴りあげた。体

力のなくなっている父は、ひざを

折ったまままあお向けに倒れた。

「お父さん、大丈夫ですか……」

母があわてて駆け寄り父を抱き

おこした。

「出るのか出ないのか、どっちな

んだ」

八路が銃のしりりで父の頬を軽く

こづいた。

「お父さん……」

母に支えられ、父はよろけるよ

うにM未亡人の前に這い寄り、地

面に手をつけてM未亡人をキッと

見上げた。血の気の失せたその腹には

、油汗がにじんでいた。(略)

M未亡人は青ざめたまま、茫然

と立ちつくしていた。

(一七九頁終わりから二行目〜一

八二頁七行目)

ならん、どっちだ」

厳しい視線を向けた。徳志は一

瞬、こくりと唾を呑んだが、覚悟

をきめ、

「あの子は、私のたった一人の息

子です、十歳の子供が、あの地獄

の中を生き抜いたのです、どうか

生かしてやって下さい、その代り

に私が卡子の中へ戻ります」

と云った。上級者らしい男は、

樞の中で呆然とたち竦んでいる少

年と、陸徳志を見比べ、銃を構え

ている兵隊に、

(一一八頁一八行目〜二〇頁一

行目)

「お前の中国語はおかしい、日本
人か！ 日本人の子は留用技術者
の家族でなければ通さん」

「僕は中国人、陸徳志の子供です

」

(月刊誌「文藝春秋」一九八七年

八月号四二二頁上段十三行〜十四

行目。傍線部分は単行本でカット

されている)

対照表 一一

原告の著作物「十子 出口なき大地」のストーリー構成(番号は頁順、頁数は放送新聞社刊の四六判単行本のもの)

被告の著作物「大地の子」のストーリー構成(番号は原告の著作物の番号に対応する番号、頁数は四六判単行本のもの)

l. 包圍戦下の長春の惨状についての描写(二〇二頁〜二三四頁)

l. 包圍戦下の長春の惨状についての描写(九六頁〜一〇二頁)

a. 動力源の遮断により工場の機能が麻痺し工員や技術者も去って行った(二〇二頁〜二〇三頁)

m. どうもろこし饅頭で飢えをしのぐ(九六頁) 国民党の兵隊が押し入って食糧を奪う(九六頁〜九七頁)

b. 在庫を売ったり物々交換で食糧を得る(二〇四頁〜二〇五頁)

e. 物価は日に日に急騰し貨幣価値が暴落した(九七頁〜九八頁) 最後の金で煙草の葉を買ってくる(九八頁)

c. 嗜好品(酒)を造って食糧をたくさん手に入れた(一〇五頁)

c. 嗜好品(煙草)を造って食糧をより多く手に入れた(九八頁〜一〇〇頁)

d. 国民党軍には物資は豊富にあった(二〇五頁)

t. 街路樹にもたれたままの死人がいる様子(九九頁)

e. 物価は日に日に急騰し貨幣価値が暴落した(二〇五頁)

d. 国民党軍には物資が豊富にあった(九九頁) 但し民兵には物資は補給されなかった

f. 冬は日本人が引き揚げた空屋の壁やドアをはずして焚きつけにした(一〇六頁)

n. 水春路には食糧があった(九九頁) やせ細った兵隊が煙草を吸って息絶えた(九九頁〜一〇〇頁)

g. ずる賢く立ちまわった親族のエピソード(一〇六頁〜一〇九頁、一一三頁〜一一四頁、一一七頁、一二二頁〜一二四頁)

k. その兵隊は陸一心の妹のお守り袋を持っていた(一〇〇頁)

h. 遠くで銃声がするようになったが、しばらくすると聞こえなくなった(一一〇頁)

k. その兵隊はやせ細り腹部だけ膨らんでいた(二〇〇頁)

i. 市内では餓死者が続出するようになった(二〇一頁)

l. 国民党軍の飛行機からの落下傘による食糧投下とそのおこぼれを奪いあう市民の様子(二〇一頁)

j. 甥の死亡(一一〇頁〜一一三頁)

q. 楡の葉や野草を食べて飢えをしのいだ(二〇一頁)

k. 飢えのためやせ細りおなかだけが膨らんでいる様子(一一三頁、一一八頁〜一九九頁)

o. 高粱酒の搾り滓を食べて飢えをしのいだ(二〇一頁)

l. 国民党軍の飛行機からの落下傘による食糧投下とそのおこぼれを奪いあう市民の様子(二〇四頁〜二〇五頁)

f. 空家の窓枠、扉、天井の張り板が取り去られ焚きつけにされた(二〇二頁)

m. 一個のどうもろこし饅頭を家族で分けあう様子(二一五頁)

25. 日干し煉瓦の壁だけの家が多くなった(二〇一頁)

n. 「中国人街」の城内の様子。そこでは食糧が入手できた(二一六頁〜二一七頁)

r. 寝たきりで交互に声をかけあって起こしていた(二〇一頁)

o. 高粱酒の糟、大豆の搾り滓で飢えをしのぐ(二一八頁)

r. 寝たきりで交互に声をかけあって起こしていた(二〇一頁) 一心は夏になるとなぜか死に顔するようになった(二〇二頁)

p. 弟の出生(二一九頁〜二二〇頁)

h. 全てが焚きつけに消え座右の銘だけが残っていた(二〇二頁)

q. 雑草や楡の葉を鍋んで食べ、さらには楡の樹皮をしやぶる(二二〇頁〜二二二頁)

h. 遠くで砲弾の飛び交う音がしたが止んだ(二〇二頁)

r. 体力を消耗しないようにじっと横になっているが、歌を歌うことで生きていることの証にしていた(二二三頁〜二三三頁)

s. 兄の死亡(二二四頁〜二二七頁)

t. 街路樹の葉が食べつくされ、街路樹の根元に倒れた人が放置されている様子(二二七頁)

- u 犬が赤ん坊を食べる様子とその犬を人が食べる様子(一二七頁〜一二九頁)
- v 父が過去に日本軍に金を貸したことを悔やむ様子(一二九頁〜一三〇頁)
- w 工場の技術者の死亡(一三〇頁)
- x 長春に人肉市場が立つ(一三二頁)
- y 父が最後の品を売る決意をする(一二二頁〜一二三頁)

2 父が長春脱出を決意する(一二三四頁)

- 3 父が市長に留用解除を要請に行ったところ市長から裁判として大量に食糧を渡され、思わぬところで脱出に必要な食糧を手に入れる(一二三四頁〜一二六頁)

- 4 他の人たちが集団で出るという情報が入り同行することとなって脱出の日取りが決まる(一二六頁〜一二七頁)

- 5 手に入れた食糧をみんなで食べ体力をつける(一二七頁)

- 6 脱出を決めたあと赤ん坊が死亡し、置いて行くことになる(一二七頁〜一二九頁)

- 7 脱出の日、家を出て長春を南へ南へと歩いて行く(一二九頁)

- 8 父は脱出グループの団長になることを要請され引き受ける(一二四〇頁)

- 9 長春市民の脱出ルートは洪熙街の十字を通ると決められていた(一二四〇頁)

2 父が長春脱出を決意する(一〇二頁)

- 3 母がひそかに食糧を準備していたことがわかり、思わぬところで脱出に必要な食糧を手に入れる(一〇三頁)

- 5 父が食糧を子に食べさせようとする(一〇三頁) 但し母に拒否される

- 4 十字の門が中秋節には開くことが多いという情報が入り脱出の日取りが決まる(一〇三頁)

- 6 脱出を決めた後一心(子)は長春に残ると言い出す(一〇四頁)

- 1.4 長春市街の様子の描写(一〇五頁)
- 1.4 街路樹の葉がむしりとられ、幹の汁まで吸い尽くされ葉きつげにされた(一〇五頁)
- 舗装道路のアスファルトも掘り返された(一〇五頁)

- 7 脱出の日、家を出て南の方向へと歩いて行く(一〇五頁)

10 歩くのが大変な様子の描写(二四〇頁〜二四一頁)

11 緑豊かな「解放区」への幻想(二四二頁)

12 ずる賢い親族の約束(二四二頁〜二四三頁)

13 十子の門の前に食糧が大量にある様子(二四二頁〜二四三頁)

14 日本人が引き揚げて空になった家に中国人が移り住んでいる話(二四三頁)

15 中国人から戦乱を生き残る民の知恵の話をされる(二四三頁〜二四五頁)

16 露店で食糧を買おうとしたら財布を取られて食べられなかった様子(二四五頁〜二四七頁)

17 十子の門の様子(二四七頁)

a 難民でこったがえしていた(二四七頁)

b 国民党の兵隊が荷物の検問をしていた(二四七頁)

c 兵隊が二度と長春市内に戻れないことを強調する(二四七頁)

d もう一度考えたりして歩みが滞ると国民党軍が銃剣でせつついて前に進ませた(二四七頁)

e 道の両脇は鉄条網で挟まれていた(二四七頁)

18 十子の中に入り、妙に静かな様子でありおか

10 歩いて行く様子の描写、歩くのが大変な様子(二〇五頁)

父母が一緒に行こうと言うが一心(子)は決意を要えない(二〇五頁〜二〇六頁)

14 日本人が引き揚げた住宅地に父が入って探すと窓枠やガラス、屋根瓦が割りとられ、中には中国人が住んでいた(二〇六頁)

15 中国人である父から戦乱を生き残る民の知恵の話をされる(二〇六頁〜二〇七頁)

17 十子の門の様子(二〇七頁)

17 a 脱出する人の列があった(二〇七頁)

9. 脱出するにはこの道しかない(二〇七頁)

17 e 道の両側に鉄条網が張られている(二〇七頁)

17 b 国民党の兵隊が検問している(二〇七頁)

17 a 検問のために長い列ができていた(二〇七頁)

21 a 時々荷物を没収する(二〇七頁)

17 d 引き返そうとする人もいるが結局は十二(二)と進んだ(二〇七頁)

いと思う(一四八頁)

19 初めて身近で腐乱死体を見る。その死体にはあたりが黒くなるほどのハエの大群がむらがついてた(一四八頁〜一四九頁)

20 進むに連れて餓死体の数が増えた(一四九頁)

21 国民党の兵隊が荷物検査をする様子(一四九頁)

a めぼしい物を奪われた(一四九頁)

22 八路軍の兵隊とのやりとり(一四九頁〜一五〇頁)

a 長春市内の様子を聞かれる(一四九頁)

b 長春市内の飢餓状況を説明する(一五〇頁)

c 進む方向を示して、行くことを許可される(一五〇頁)

23 死体の描写(一五〇頁)

24 羅氏がたむろしているところの様子(一五〇頁)

25 崩れ落ちた家の壁が並んでいるところに膝を下ろす(一五〇頁〜一五一頁)

26 夜になり寒さにふるえる(一五一頁)

27 夜、目を覚まし、父に附られ、慰められ父の体の温もりに安らぎ再び眠る(一五一頁)

16 十字の門の前で水を飲む(一〇七頁)

21 十字の門で国民党が荷物検査をしている様子(一〇七頁〜一〇八頁)

22 国民党の兵隊とのやりとり(一〇八頁〜一〇九頁)

22 a 長春から出る理由を聞かれる(一〇八頁)

22 b 長春市内の飢餓状況を説明する(一〇八頁)

17 c 兵隊から二度と長春市内に戻れないことを強調される(一〇八頁)

22 c 脱出を許可される(一〇九頁)

この過程で陸一心が父母と同行することになる

18 十字に入り荒地の様子に不安を感じる(一〇九頁)

24 羅氏がたむろしている様子(一〇九頁)

28 朝目を覚まし、周囲が死体だらけであることに気がつく。地面に十分埋まっていない死体の描写(一五二頁)

29 父との十子の出口の門をめぐる会話(一五二頁)

- a 父にここはどこか聞く(一五二頁)
- b 父が国民党と八路軍の中間地帯であることを説明し、解放区の出口を示す(一五二頁)
- c 解放区側の門を見てその描写(一五二頁)
- d 父にあの門はあけてもらえないのかと質問する(一五二頁)

30 近くにいた難民から十子の門の開門と野草摘みについて教えられる(一五三頁)

31 飲み水に困り陸みの雨水らしい水を沸かして飲む(一五三頁)

32 八路軍と国民党軍の撃ち合い(一五三頁～一五四頁)

33 高粱を炒った粉を口にする(一五五頁)

34 排泄で地面が洗われ目を見開いた死体が出てきて驚く(一五五頁～一五六頁)

35 死亡した女性から流れる血を乳呑み児がなめている(一五六頁～一五七頁)

36 死体をにらんでいる男が骨をしゃぶっており、この男の目が向けられたら食い殺されると恐怖に

- 29, 40, 41 父が八路軍側の門の様子を見に行くと言い、十子の出口の門をめぐり父子の会話がなされる(一〇九頁～一一〇頁)
- 41 父が十子の開門の様子を探りに行くという(一〇九頁)
- 29 b 父が解放区の方を示す(一〇九頁)
- 29 c 解放区側を見てその描写(一〇九頁)
- 11 緑豊かな解放区の様子(一〇九頁)
- 29 d, 40 父になぜ八路軍はすぐ通してくれないかと聞く(一〇九頁)

37 棒切れを持った難民から襲われ、食糧を奪われる(一一〇頁)

近くにいた難民から一緒に新入りから食料を奪おうと誘われるが拒否する(一一〇頁～一一一頁)

38 近くの難民からすぐ奪う側に回ることになると言われる(一一二頁)

49 激しい雷雨の様子(一一二頁)

34, 49 雨で地面が洗われ死体がでてきて驚く様子(一一二頁～一一三頁)

34, 49 c 雨で土が洗われ死体が現れる(一一三頁)

34 眼を見開いた死体に触れ、驚く(一一二頁)

19 腐乱死体を初めて見て驚く(一一二頁)

おののく(一五七頁)

↑

蚊が多くてなかなか眠れない(一一二頁)

↑

37 新入りに対して難民の大群が棒切れなどを持って襲い食糧を奪う(一五七頁〜一五八頁)

a 難民が棒切れなどを持って獣のような声をあげて新入りをとり囲む(一五七頁)

b 食糧を奪うと難民はすぐに元の位置に戻る(一五七頁)

c 奪われた新入りは呆然として立ちつくしていた(一五七頁)

d 難民は奪った食糧をすぐに飲み込む(一五八頁)

e 自分の家族に分けようと食物を手を持っていった難民は他の難民に囲まれた奪われる(一五八頁)

↑

26 朝、寒さにふるえる(一一二頁)

↑

27 一心は父母の懐りの中でようやく眠った(一一二頁)

38 他の難民からいずれあなたたちも奪う側に回ると言われる(一五九頁)

↑

44 死体の山に気がつく(一一二頁)

19 死体には蠅が真つ黒にたかっている(一一二頁)

44 解放区の側に死体の山がある(一一二頁)

45 八路軍の兵隊が死体を整理している(一一二頁)

39 難民が人肉を円陣を組んで食べていた(一五九頁)

↑

40 八路軍は人民解放軍と称しているのに何故十子の門を開けないのかと不思議に思う(一一二頁〜一一三頁)

↑

40 父との間で八路軍は人民のために戦っているというのに何故門を開けてくれないのかと質問する(一六〇頁)

↑

開門の噂がたつ(一一三頁)

41 父が八路軍と出門の交渉に行くが相手にされない(一六一頁)

↑

1. u 幼児の死体が持ち去られる(一一三頁)

↑

42 十子の曠野での自然の恐ろしさについての描写(一六一頁〜一六二頁)

↑

42 十子の中での月の神々しさ(一一四頁)

43 十子の夜の恐怖感についての描写(一六二頁〜一六四頁)

↑

27 父が子に耐る(一一四頁)

↑

44 父とともに死体の山を見、神経がおかしくなり恐怖心を感じなくなる(一六四頁〜一六七頁)

45 八路軍の兵隊が転っている死体をかき集めている様子(一六七頁〜一六八頁)

46 脱出グループの一部が出門する(一六八頁)

47 父がバカ正直だとなじられ、実は身分証明書と特許証を持ってきたことを告白する(一六八頁〜一七三頁)

48 親族が出門の交渉に行く(一七三頁〜一七五頁)

49 激しい雨が降る様子(一七五頁)

a 信用できる飲み水と喜び鍋などに受けとめる(一七五頁)

b ふともも自分たちもびしょ濡れになる(一七五頁)

c 雨で土が流され死体が出てきた(一七五頁)

d 死体がただの石ころか棒切れくらいにしか見えなくなっていた(一七五頁)

新入りの難民から食料を奪うことを決意する(一一四頁)

43 夜、恐怖感で目が覚める(一一四頁)

49 d 一心は死体を見ても何も感じなくなる(一一四頁)

37 新入りの難民から食糧を奪う(一一五頁)

37 b 棒切れをもって襲う(一一五頁)

37 e 食糧を手にとると他の難民が奪いに来る(一一五頁)

33 炒った豆を口にする(一一五頁)

42 十子の中の自然についての描写(一一六頁)

近くの難民が匪賊に殺される(一一六頁)

39 匪賊が円陣を組んで人肉を鍋で煮て食べる(一一七頁)

36 髭ぼうぼうの男に見つめられ、食い殺されると恐怖におののく(一一七頁)

男はそのまま倒れた(一一七頁)

50 八路軍から出門を許可される(一七六頁〜一七八頁)

但し「満州国」の特許証は返されなかった

50 開門の情報があり八路軍側の門へ行く(一一七頁〜一一八頁)

51 他の日本人から非難される(一七八頁〜一七九頁)

一

52 出門の様子(一七九頁〜一八三頁)

- a ひとりずつ名前と統柄を点検される(一七九頁)
- b 出門が許可される(一七九頁)
- c 身分が上らしい兵隊が割り込んでくる(一七九頁)
- d 仲間の一人は出門が許可されない(一七九頁〜一八〇頁)
- e 遺族は技術者でないから出門はさせないと言われる(一八〇頁)
- f 父の抗議に対し文句を言うなら全員出せないと喝喝をされる(一八一頁)
- g 父が八路軍に土下座して頼む(一八一頁)
- h 八路軍が拒否する(一八一頁)
- i 父が遺族に謝る(一八一頁〜一八二頁)
- j 仲間である遺族を残して出門する(一八二頁)
- k 遺族から非難される(一八二頁〜一八三頁)
- l なおこのエピソードはすつと父の心に残っていた

52 出門の様子(一一八頁〜一二〇頁)

- a 身分証の確認(一一八頁)
- b 出門が許可される(一一八頁)
- d 仲間の一人である一心が止められる(一一八頁〜一一九頁)
- e 父は八路軍に出門を許可するよう求め地面を這う(一一九頁)
- h 八路軍の兵隊は銃口をつきつけて拒否する(一一九頁)
- c 身分が上らしい兵隊が割り込んでくる(一一九頁)
- 父は自分と引き換えに一心を出門させるよう求める(一一九頁)
- 八路軍は一心の出門を許可する(一二〇頁)
- 一心は泣きじゃくり、「爸爸！」と叫ぶ(一二〇頁)
- l なおこのエピソードはすつと父の心に残っていた

原告「卡子 出口なき大地」引用文
(頁行数)

被告単行本「大地の子」上巻引用文(頁
行数)。但し [] 部分は月刊誌にな
く、単行本の時に挿入された部分。

【和訳】

偉大な革命のために人民が血を流すエピソードを設定し話を起こす。

翌日、公安局から八路军が一人派遣され
て、私の家に常駐することになった。
笑うと目が糸のように細くなる、人なつ
っこい、趙^{チウ}という名の若い八路である。
鉄砲をかつき、腰にはピストルと、手榴弾
を三個もぶら下げていた。日本語を上手に
話した。歩哨も立って、工場のまわりをま
た二十四時間体制で巡視した。

趙さんは私にいろんな話をしてくれた。
「僕たちの旗は紅旗という赤い旗だ。あの
赤い色は、なんの色だかわかるか？」

私は夕陽を連想したが、そうとは口にせ
ずに黙って趙さんの顔を見つめた。

「血の色だ」

私はぎくっとした。気持ちが悪い。

「いや、人民の血の色なのだ。革命のため
に流した人民の血の色で赤く染まっている
のだ。あんたは今度の戦いで血を流した。
気の毒なことをしたと思う。だが、これは
中国解放のための戦いなのだ。偉大な革命
のための戦いなのだ。あんたは武器を持っ
て戦ったんじゃない。だけどあんたも戦士
の一人だよ。」

小英雄(シャオインシュン)だ。

あの赤い血には、あんたの血も流れてい
ると思うといい。紅旗の赤い色は、あんた
も一緒になって染めたんだと思うといい。
そうすりゃ、僕たちは仲間だ。同志だ。わ
かるか？」

あまりよくはわからない。でも、趙さんが
私を元気づけてくれようとしていることだ
けはわかる。それでいい。

「だけど、爸爸の話では、八路が入って
来たら、百姓と乞食以外は、皆殺しにさ
れるんだって、だから早く逃げなきゃだ
めだよ」

一心は、ぞっとした。四つ角まで来る
と、二人は左右に手を振り、駆け足で帰
って行った。

公園のところまで来ると、人だか
りがしていた。人垣をくぐって前の
方へ出ると、公園の大木に、顔も体
も傷だらけで、服も引き破れた十七
、八歳の八路軍の捕虜が、荒縄で縛
りつけられている。その前に五人の
国府軍の兵が銃を構えている。よほ
ど拷問を受けていたのか、顔は紫色
に膨れ上がり、むき出しになった手
足も青黯い痣だらけで、裸足であっ
た。遠巻きに見ているのは、長春の
市民たちであった。

兵隊の一人が、

「こら、八路のスパイ奴！どこか
ら入って来たか白状せい！」

「これが最期だ、白状すれば助けて
やる！」

と云っても、若い男は口を固くひ
き結んだまま、眼を閉じている。

「よし、公開処刑を行う、用意！」
号令がかかった。兵隊が黒いめか
くしの布を持って、男に近付くと、
「不用」

と拒否した。瞬時、不気味な沈黙

趙さんも夕陽が好きだった。鉄砲を肩にもたせかけて窓辺に腰を下ろし、夕陽を受けながらよく口笛を吹いて聞かせてくれた。哀愁を帯びていながら、雄大な情景を思わせる美しい調べだった。澄んだ目をしていた。この時、私は趙さんを仲間だと思うことができた。それはうれしいことではあった。だが夕陽がなんだかもう私一人のものではなくなっていくような気がした。(六二二頁三行〜六三頁七行)

〔承〕

趙を承けて、そのことから偉大な毛沢東を引き出す。

が深ったが、銃声が鳴るのと同時に、「毛主席万歳！」目かくしを拒否した眼がかっと見開き、天を仰いで絶命した。

(九四頁七行〜九五頁三行)

死を前にして、「毛主席万歳！」と叫んだ男の声と、天を仰いで見開かれた眼が、忘れられなかった。

(九五頁四行〜五行)

趙さんはこんな事もいった。「太陽は中国共産党であり、偉大な毛沢東同志なのだ。陽が必ず昇るように、毛沢東が必ず高く輝いて、僕たちを幸せにしてくれるんだ。(略)」

(六三頁八〜十行)

一心は、学校が閉鎖になった日、家へ帰る途中、公園で見た八路軍の十七、八歳の兵士のことを思い出した。国府軍の兵隊に捕えられ、自白すれば助けてやると云われても拒絶し、「毛主席万歳！」と叫んで、銃口で処刑されたのだった。解放区には、若い兵士があのように敬い、信じて死んで行った毛沢東という偉い人がおり、

(一一三頁二行〜六行)

〔三〕

提示された「偉大なはずの毛沢東」に対し、その人物を知っているか否かという、会話体による疑問を反転として、その人物に対し必ずしも提示されたほどには肯定的なイメージを抱かない状況へと展開させてゆく。

「(略) 毛沢東、知ってるか」

そんな名前は聞いたこともない。

家へ帰ると、

陸徳志の方が先に

あの太陽は私の夕陽であり、私のガラス王なのだ。私一人の世界でなくてはならない。あの中に毛沢東などという知らない小父さんが入っているなんて……。あのガラス玉は真っ赤に澄んでいなければいけない。そうでないと、私が見えなくなってしまう。

だが、夕陽に手を差し延べて、その腕に銃弾を受けた瞬間から、ガラス玉はすでに私の魂を魅了した、あの完璧な輝きをなくしていた。ガラス玉を透かして見ていた、つかみどころのない未来に、何かしら不安な陰りが射しはじめていた。
(六三頁十行〜十七行)

結

八路軍が卡子の門を開けないことに先ず触れ、そのことに對する疑問を抱いた瞬間に、長春市内での八路軍に對するかつてのイメージのうち、肯定的なイメージのみを引き出して子供心に想起させる形をとり、次にその肯定的イメージと對比して「なぜ人民の味方のその軍隊が、卡子の門を開いて人民を救ってくれようとしなののか」という趣旨の疑問を子供の視点から投げかける設定で結ぶ。

今まで、あの八路軍が長春を囲んで食糧攻めに行っているなんて、信じようとは思わなかった。あれは国民党が飛ばしているデマだと、自分に言い聞かせてきた。でも、今、私の目の前でくり広げられているこの光景は……あの橋門を固く閉じて開けないのは、まちがいでなく、八路軍である。

八路軍は人民のために戦っているのだと、趙さんは言った。人民とは誰のことなのかと尋ねたら、

「人民とは中国に住んでいるすべての人だ。あなたのお父さんも、中国のために薬を作っている。だから僕たちの仲間だ。あなたのお父さんも、あなたも、人民だ」
趙さんはそう言った。それなのに、あな

掃宅していた。
「どうした、遅いので心配していたところだよ」

一心は、公園で見て来たことを話し、
「毛主席って、どんな人？」
と聞いた。陸徳志は困惑した顔を

したが、淑琴は珍しくきつい口調で、
「二度と、その言葉を口にしてはいけませんよ、私たちもあらぬ疑いをかけられ、処刑されます、そんなことは忘れて食事に行きましょう」と云った。
食事は高粱飯と豆腐の

湯、野菜の煮つけだった。(九五頁六行〜十三行)

「あんなに近く解放区があるのに、なぜ八路軍はすぐ通してくれないの」
一心は不思議だった。
(一〇九頁終わりから二行〜最終行)

解放区のバリケードの近くに死体の山があるのは、卡子が開くのを待ちながら死んで行った死体を、八路軍の兵隊が整理しているように思われた。

これほどの、餓死者を知らながら八路軍はなぜ卡子を開けないのか、バリケードを隔てた向う側に広がっている収穫前の畑を遠く望みながら、一心は、学校が閉鎖になった日

私たちは今、その人民を殺している。あの門を閉ざしていることで、毎日、これだけ多くの人を、目の前で殺している。長春市街の中で毎日死んでいく人の数もいれたら、もっともっと多くの人を殺していることになる。人が人をこんな風にして殺しているのだろうか。

「お父さん、お父さんは八路軍の人たちはいい人たちだって言ったでしょ？」

「そうよのう」

「じゃあ、どうしてその人たちが、こんなひどいことをするのか？あの人たち、ほんとに八路軍なんでしょ？」

「八路軍じゃ。朝鮮人の八路じゃ」

「じゃあ、どうして、あの門を開けてくれないの？門を開けてくれさえすれば、あたしたちこんなひどい目に遭わなくなつてすむんでしょ？」

（一六〇頁一行〜終わりから二行）

あの夕陽はもう、私の赤いガラス玉なんかじゃない。趙さんのウソつき。なにが紅旗だ。何が人民の赤い血だ。今、真っ赤に染まっているこのカ子を、あなたはどう説明するのだろうか。あの赤い旗の色は、私も一緒に染めたんだと思うと言った。そうすれば僕たちは仲間だと言った。いやだ。人民をこんな風にして殺す人たちの旗じゃないか。私はそんな人たちの仲間になんかなりたくはない。

（一六二頁七行〜十一行）

、家へ帰る途中、公園で見た八路軍の十七、八歳の兵士のことを思い出した。

国府軍の兵隊に捕えられ、自白すれば助けてやると云われても拒絶し、「毛主席万歳！」と叫んで、銃口で処刑されたのだった。解放区には、若い兵士があのように敬い、信じて死んで行った毛沢東という偉い人がおり、今や八路軍と云わず、人民解放軍と称しているのに、どうして解放区のカ子を開いて、自分たち多くの人民を救ってくれないのか——、一心は不思議で、理解できなかった。

二日後の朝、陸一心たちがまだ半ば眠っている前方を、何千人もの（略）

（一一二頁終わりから三行〜一一三頁八行）

死体の山が解放区のバリケードに近い方に、積み上げられているのは、カ子が開くのを待ちながら死んで行った死体を、八路軍の兵隊が整理しているように思われた。何千、何万にものぼる餓死者を知りながら、八路軍はなぜカ子を開けないのか、なまじバリケードの向うに収穫期の田畑が広がっているだけに、陸徳志は憤った。

二日後の朝、陸一心たちがまだ半ば眠っている前方を、何千人もの（略）

（月刊誌八七年八月「四章 爸爸」四二〇頁、上段 四行〜九行）

原告の頁数は
 『不条理』→『不条理のかなた』（読売新聞社）
 『出口なき大地』→『卡子 出口なき大地』（読売新聞社）
 『続』→『続 卡子』（読売新聞社）
 文・上→『卡子』（文春文庫、上巻）
 文・下→『卡子』（文春文庫、下巻）
 という標記に基づいて表示し、被告の頁数は全て単行本『大地の子』に基づくものとし、かつ上巻・中巻・下巻を上・中・下と標記することによって表示する。
 具体的な表現を引用している部分は「」で示す。

横構成西文要素から見た△主體の流れの類似点

横構成西文要素	原告 生口	被告 生口
<p>書き出しの類似性 （侵略戦争の問題から日本人に対する罵倒表現を記述し、日本民族の一人であることを恥じた子供の頃に触れ、敗戦の日の状況に話を転じて行く）</p>	<p>教科書問題の中で侵略戦争の問題を提起し、日本人に対する「日本鬼子！」という罵倒の表現を引き出し、自分が日本民族の一人であることを恥じた小さい頃からの試えぬ屈辱感に触れ、その困って来るところの、一九四五年八月十五日の敗戦の日へ、ふと、視線を向ける。 （『出口なき大地』七〇―七十五頁） 「（『日本鬼子！』（日本の鬼め！）とのしられて、石を投げつけられることもあった。日本が何かをやるたびに、そのはね返りが千本の針となつて突き刺さつてきた。日本軍の残虐性を見せつけられ、それが真実であつたことを知つた時には、自分がその侵略民族の一人であることを恥じた。」 （『出口なき大地』十一頁） 「この日本のために、石を投げつけられ、つばを吐きかけられても、私はじつと忍んできたというのか。これがわが祖国であつたか……。」 （『出口なき大地』十二頁） 「私は日本にも中国にも、貸し、があるような、やりきれない気持ちで遠くへ目をやった。」 （この後、一九四五年八月十五日の終戦の混乱期の話を始める）</p>	<p>文化大革命の中で侵略戦争の問題を提起し、日本人に対する「小日本鬼子！」という罵倒の表現を引き出し、自分が日本民族の一人であることを恥じた小さい頃からの試えぬ屈辱感に触れ、その困って来るところの、一九四五年八月十五日の敗戦の日へ、ふと、視線を向ける設定にしている。 （上、十七―四四頁） 「これも日本人の血を持つ故の差別かと思うと、自分の血が呪わしい」 （上、二二頁） 「なぜ小日本鬼子、狗雑種とまで罵倒されるのか？ 日本の戦争風児なるが故に、幼い頃からこの二十数年間、自分の体に捺印のように捺された痕跡――、小日本鬼子、とは何かを、心の底から問いかけた。」 （この後、一九四五年八月十五日の終戦の混乱期の話を始めている）</p>

<p>6 長春を舞台として終戦当時の状況を描写、後にそこを脱出する。</p>	<p>4 主人公が子供心に終戦の異様な事態を感じ取る。</p>	<p>5 貴重なものを肩に担いで持ち去って行く厳つい男の背中と、たおやかに揺れる美しい布製のものの不釣り合いな組み合わせによって、子供心の哀しさと恐怖を描いた。</p>	<p>2 小説の描く時代をソ連軍参戦の時に遡らせる。</p>	<p>(「出口なき大地」十五頁) なお、表現の一部に関して「日本鬼子！日本狗！」などと叫びながら石を投げつけてくる少年の姿は鮮烈であった。」 (「不条理」一三五頁)</p>
<p>主人公は家族と共に、長春で育つ。 (「出口なき大地」十五頁以降等) 対照表一参照。</p>	<p>化学天秤や応急医薬品などを毛布にくるみ、主人公の姉が大事にしていた琴の糸でゆわえて肩に担いで持ち去って行く厳つい男の背中と、たおやかに揺れる琴の錦の房との不釣り合いな組み合わせを描くことによって、子供心に覚えた哀しさと恐怖を描写した。</p> <p>「揺れる」状態を表現するに当たり、 「ゆーら、ゆーら」 という擬態語を用いた。 (「出口なき大地」五九頁)</p>	<p>(「この何とも異様な光景を、私は子供ながらに緊張した気持ちでじっと眺めていた。」) (「不条理」八一頁五行目)</p>	<p>北を守る開拓団を見捨てて南下した関東軍の話。関東軍がいるはずだった所はもぬけの殻であったことを描写。 (「出口なき大地」一八頁十二行、二十頁七行、終わりから三行目)</p>	<p>一九四五年八月九日のソ連軍参戦の時期に時間をいきなり戻す。 戻す場所…自分が生まれ育った地。 (「出口なき大地」十六頁)</p>
<p>主人公は長春で養父の家族の一員として育つとしている。 (上、八十頁等) 対照表一参照。</p>	<p>主人公にとって大事な妹を肩に担いで持ち去って行く厳つい男の背中と、たおやかに揺れる赤いお守り袋との不釣り合いな組み合わせを描くことによって子供心に覚えた哀しさと恐怖を描写している。</p> <p>「揺れる」状態を表現するに当たり、 「ぶらん、ぶらん」 という擬態語を用いている。 (月刊誌「文藝春秋」九十年二月号四五二頁下段七行、十行) 単行本では、この件をカットしている。 (下、一七〇頁)</p>	<p>「勝負は子供心にも、異様な事態を感じ取った。」 (上、四七頁六行目)</p>	<p>北を守る開拓団を見捨てて南下した関東軍の話。関東軍がいるはずだった所はもぬけの殻であったと描写している。 (上、四六頁終わりから三行目)</p>	<p>(上、四四頁) 一九四五年八月九日のソ連軍参戦の時期に時間をいきなり戻している。 戻す場所…自分が育った地。 (上、四五頁)</p>

<p>7 避難民を助け、 その人が家で重病 に罹る。</p>	<p>8 大きな主題の一つ として父の愛を描 いた。</p>	<p>9 夕陽を縦軸の一つ として用い、希望 を託する対象とし て描いた。</p>	<p>10 美しい口笛のメロ ディーを用いて、 その音が主人公の 心を惹きつけ、そ の曲が異なる国の 心を代表すること を描いた。 それによってまだ 熟知していない国 への理解へと誘 い、それがその後 の人生の方向性を 決めることを暗示 する。 口笛の主は「澄ん だ涼しい目」をし ている。</p>
<p>路頭に迷う開拓団の人を助けて家に住 まわせ、世話をする。 （『出口なき大地』三四、三五、五五 頁等） その開拓団の人が家で重病に罹る。 （『出口なき大地』五五、一〇八、 一〇九頁）</p>	<p>人道的な生き方をした「父の愛」を柱 として描く。 （『出口なき大地』三一、三二、四四 、四五、六八、一三六頁等多数）</p>	<p>夕陽を縦軸の一つとして用い、卡子以 外では希望を託する対象として描き、 それと対比させて、卡子内では逆に最 も恐ろしい無気味さを表現する手段と して用いた。 無気味さを表す時には「赤味」という 色を用いて表現した。 （『出口なき大地』十五頁、一六一頁 等）</p>	<p>口笛の上手な青年の人物像を、以下の 構成要素により設定した。 ①口笛が上手 ②美しい口笛のメロディーは、哀愁を 帯びていながら、雄大な光景を彷彿 とさせた。 ③主人公はそのメロディーに心を惹き つけられた。 ④そのメロディーに聞き覚えがあるか 否かを論じ、原告は思い出す。 ⑤その曲名を初めてその時に知る。 ⑥その歌は中国人の心を代表する歌で あった（「九・一八一」）。 ⑦口笛の主は日本語を話した。 ⑧口笛の主は、原告に中国の話をし、 原告を励まし、原告を諭す。 ⑨口笛の主は「澄んだ目」をしていた</p>
<p>路頭に迷う開拓団の一人を助けて家に 住まわせ世話をする設定にしている。 （上、八六頁） その開拓団の人が家で重病に罹るとし ている。 （上、八七頁）</p>	<p>人道的な生き方をした「父の愛」を柱 として描いている。 （上、八九頁等多数）</p>	<p>夕陽を縦軸の一つとして用い、卡子以 外では希望を託する対象として描き、 卡子内で恐ろしい無気味さを表現する 際に原告が夕陽を用いて描いた部分は 全て「月」に置き換えている。 無気味さを表す時には「青味」という 色を用いて表現している。 （頁数、多岐に亘る）</p>	<p>口笛の上手な青年の人物像を、以下の 構成要素により設定している。 ①口笛が上手 ②美しい口笛のメロディーは、やさし く切なく、雄大な草原を吹き渡って いった。 ③主人公はそのメロディーに心を惹き つけられた。 ④そのメロディーに聞き覚えがあるか 否かを論じ、陸一心は思い出さない ⑤その曲名を初めてその時に知る。 ⑥その歌は日本人の心を代表する歌で あった（「さくら」）。 ⑦口笛の主は日本語を話した。 ⑧口笛の主は陸一心に日本の話をし、 陸一心を励まし、陸一心を諭す。 ⑨口笛の主は「涼しげな眼差し」をし ていた （上、一九九、二〇〇、二一〇、二一 一、二一二頁等）</p>

<p>1 1 長春の城内を描写する。</p>	<p>城内を肉と油とニンニク、雑踏、道幅の狭さ、賑やかな街並み、弱者だけでは危険である等の構成要素で描いた。 対照表一参照。</p>	<p>城内を肉と油とニンニク、雑踏、道幅の狭さ、賑やかな街並み、弱者だけでは危険である等の構成要素で描いた。 対照表一参照。</p>
<p>1 2 食糧封鎖下の長春で苦しむ。</p>	<p>対照表一参照。</p>	
<p>1 3 長春脱出</p>	<p>対照表一参照。</p>	
<p>1 4 黒街の卡子に入る。</p>	<p>対照表一参照。</p>	
<p>1 5 卡子内の惨状を、子供の視点で、親と子の会話を通して描いた。</p>	<p>対照表一参照。</p>	
<p>1 6 死体の上で野宿し恐怖のあまり記憶の一部を喪失。喪失年齢は七歳。記憶喪失から症状、回復に至るまで、舌の筋の最も大きな柱の一つ。</p>	<p>主人公は卡子内で死体の上で野宿し、恐怖のあまり記憶の一部を喪失した。 記憶喪失年齢…七歳。 （『不条理』一三八、一三七、一四一頁等、 『統』九五、一一〇、一一二、一一〇、一五六、一五九頁等 文・下、二四四、二四六、二五四、二六一、二六八、二七〇頁等）</p>	<p>主人公はソ連軍の攻撃に遭い、死体の中に潜り込み、恐怖のあまり記憶の一部を喪失したと設定。 記憶喪失年齢…七歳。 （上、二四、六一、六三頁等、 中、二五四、二五五、二六一、二六四、二六六頁等、 下、九二、九五、一八八、一九〇頁等） 月刊誌で記憶喪失になっていない部分は、単行本の時に記憶を喪失しているように書き換えられている。</p>
<p>1 7 八路軍の卡子の門を出る時に家族同様になっている仲間を引き裂かれ（そうになる）。</p>	<p>対照表一参照。</p>	
<p>1 8 解放後の長春を描いていない。</p>	<p>主人公は、解放後、長春に戻っていない。</p>	<p>主人公は探している妹が長春にいないと聞いているのに、解放後の長春市内に全く戻ろうとしていない。</p>

<p>19 赤紫色（紫赤色）の花をつけた植物に、大地に根を張る力強さを見出し、生への希望を託する。</p>	<p>赤紫色の花をつけたアザミに、大地に根を張る生命力の強さと清冽な美しさを見出し、汚辱にまみれた現実の中から、生への思いを託する。 （『統』三九、四十頁）</p>	<p>紫赤色の花をつけた砂朶に、大地に根を張る生命力の強さと清冽な美しさを見出し、汚辱にまみれた現実の中から生への思いを託すると設定。 （上、二一〇、二三九、三四六頁 中、一一二、二四〇頁 下、二五、二六頁）</p>
<p>20 大きすぎる衣服を着た少年兵を登場させた。</p>	<p>「小李は手がやつと出るような、だぶだぶの八路軍の軍服を着ていた。（略）緑色がかつた軍服の中で小李の体が踊っている。」 （『統』四一、四二頁）</p>	<p>「まだ背丈も伸びきらず、大衣がぶかぶかの少年のような兵たちに声をかけた。」 （上、二七五等、複数回利用）</p>
<p>21 勉強が出来る状況になり嬉しくなる</p>	<p>「勉強に参加できたことが嬉しくてならない。」 （『不条理』一三六頁四五行目）</p>	<p>「勉強できることが嬉しくてならなかった。」 （上、九一頁終わりから三行目）</p>
<p>22 宗教に関係する批判で吊し上げ。</p>	<p>宗教に関連しているとして、人民裁判まがいに吊し上げられる。 （『統』六二、六五頁）</p>	<p>宗教に関連しているとして人民裁判まがいに吊し上げられると設定。 （上、一三九、一四一頁）</p>
<p>23 学問に関係した人が救いの手を差し伸べてくれる。</p>	<p>親しくしていた者および主人公の父親が学問を奨励した関係者に助けてもらい、吊し上げから解放される。 （『統』八四、八六頁）</p>	<p>親しくしていた者および主人公の養父が学問を授けた関係者に助けてもらい、吊し上げから解放されると設定。 （上、一四一頁）</p>
<p>24 強制収容所の様子を描写。</p>	<p>強制収容所の風景を次の構成要素によって描いた。 ①二八収容所および転々とする延辺地区収容所での強制労働と惨状。 ②どこに連れて行かれるのか行き先も判らない。 ③計算が出来ない看守のエピソード。 一、二、三…をロシア語で。 ④ツルハシも立たない凍土と遺体埋葬に際し、遺体の家族を思う。 （『統』七二、七三等）</p>	<p>強制収容所の風景を次の構成要素によって描いている。 ①数力所に及び転々とする労働改造所での強制労働と惨状。 ②どこに連れて行かれるのか行き先も判らない。 ③計算能力の低い看守のエピソード。 一、二、三…を中国語で。 ④鶴嘴も立たない固い土と遺体埋葬に際し、遺体の家族を思う。 （上、一五七、一八七、一八八等）</p>
<p>25 主人公（あるいはその妹）が結核により重病となる。高価な抗生物質を</p>	<p>結核菌にやられ、瀕死の重病にあり、唯一の助かる道は抗生物質（ストマイ）を服用することだが、輸入薬で非常に高価であることを描いた。</p>	<p>結核菌にやられ、瀕死の重病にあり、唯一の助かる道は抗生物質（ペニシリン）を服用することだが、輸入薬で、非常に高価であるとして描いた。</p>

<p>服用しないと助からない。</p>	<p>病名…(結核性)骨髄炎 病気の程度…結核菌が全身に回っており、全身症状が悪い。 (『統』九二頁、『不条理』九三頁)</p>	<p>病名…(結核性)骨髄炎 病気の程度…結核菌が全身に回っており、全身症状が悪い。 (下、二三八頁等)</p>
<p>26 母(妹)との大事な絆として、いつも金糸銀糸をほくして作った人形(金糸が一筋ほつれているお守り袋)を胸に付けている。</p>	<p>主人公は母との大事な絆として、母親の綴子の帯の綾錦と人形糸をほくして作ったお人形を、いつも胸に付けていた。 〔乳児期に母から離されていた私にとって、これはその疎外感を埋める大切な役割をしていたように思う。(略)長春から持ってきた荷物の中に、なぜか十センチ四方ほどの綴子の布地が残っていた。母はその布地から綾錦の糸を抜き、糸を束ねて長さ二センチほどの小さなテルテル坊主のようなお人形を作ってくれた。母が胸に付けてくれた、金糸銀糸の混ざったそのお人形は、私の心をほんのりと温めてくれるのだった。〕 (『統』一〇四頁九〜十二行目)</p>	<p>主人公は妹との大事な絆として、母親の羽織の紐をつけた赤い金襴のお守り袋をいつも胸に付けさせている。 人形糸を一筋ほつれさせている。 「布切れのほつれた糸を、ほくし始めた。(略)赤と金色の糸が(略)一本、一本解きほくされて行った」 (月刊誌九〇年三月号四九八頁等) 「陸一心が服の下に赤い小さな袋をぶら下げているのが不思議だったので」 (上、一三九頁最終行等) 「一心にとつて赤いお守り袋は、妹の分身であった。(略)金糸が一筋ほつれていた。その一筋の金糸は、兄と妹を結ぶ絶ち難い絆に思えた。」 (中、七一頁九行〜十五行等) なお月刊誌で描かれた「布切れの糸をほくす動作」は単行本ではカットされている。 陸一心がいつも思い出す養父との思い出は田舎の川に魚釣りに行ったこととしている。 (上、一三二頁等多数回)</p>
<p>27 主人公(の弟)と父親(養父)との思い出は、田舎の川に魚釣りに行ったこと。</p>	<p>原告の父親と弟との唯一の思い出は、田舎の川に魚釣りに行ったこと。 (『統』一三二〜一三三頁)</p>	<p>陸一心がいつも思い出す養父との思い出は田舎の川に魚釣りに行ったこととしている。 (上、一三二頁等多数回)</p>
<p>28 解放区での授業風景の描写。</p>	<p>解放区での授業風景に関して、次の構成要素と着眼点によって描写。 ①子供達が毛沢東や共産党を讃える革命歌を純真に歌うことを描写し、その歌詞を書いた。 ②違う学年が机を並べる状況。 ③一番偉い人は誰か等を、質問と回答という、会話形式で書いた。 ④「九・一八」に関してのみ定義を行い、特にそれに着目して記述。 (『統』一一三〜一一七頁、一五一頁、一六五〜一六六頁)</p>	<p>解放区での授業風景に関して次の構成要素と着眼点によって描写している。 ①子供達が毛沢東や共産党を讃える革命歌を純真に歌うことを描写し、その歌詞を書いた。 ②違う学年が机を並べる状況。 ③一番偉い人は誰か等を、質問と回答という、会話形式で書いた。 ④「九・一八」に関してのみ定義を行い、特にそれに着目して記述。 (上、一二三〜一二五頁)</p>

<p>29 東北(の田舎)の地から、いきなり大都会である港町に行き、豪華なヨーロッパ風建築に驚く。他方、その地にある日本人街を描かない。租界構築行為を侵略行為とみなす視点を持たない。</p>	<p>⑤中国語の発音練習に着眼。日本人だつたから。 (『不条理』一三五頁)</p>	<p>⑤中国語の発音に着眼。中国人の子供に発音を練習させる(長春で)。 (上、九〇、九一頁)</p>
<p>30 「(小)日本鬼子!」と罵倒されて国家、民族を想起し、肉親を想起しない。孤児特有の思いの欠如。</p>	<p>「日本鬼子!」と罵られ、日本という国を想起し、自分が日本民族であることを恥じ、日本を恨む。 (『不条理』一三四〜一三七頁)</p> <p>原告は孤児でないので、孤児独特の、肉親を想起する思いを描いていない。</p>	<p>「小日本鬼子!」と罵られ、日本という国を想起し、自分が日本民族であることを恥じ、日本を恨むとしている。 (上、二二頁、四四頁等多数)</p> <p>陸一心は孤児のはずだが、孤児独特の思いが反動的に出て来ていない。</p>
<p>31 共産党員の子供版(青年版)組織への入隊(入団)が日本人であるが故に認められず、屈辱感を味わう。</p>	<p>国籍が異なるが故に、共産党員の子供版である「少年先鋒隊」への入隊が認められず、屈辱感を味わう。 (『不条理』一三九頁)</p>	<p>日本人であるが故に、共産党員の青年版である「共産主義青年団」への入団が認められず、屈辱感を味わうと設定している。 (上、一三八頁)</p>
<p>32 「既に中国側の人間である」旨の励ましを受ける。</p>	<p>日本人であるが故の屈辱感を味わっているときに、「既にあなたは中国側の人間ですよ」という趣旨のことを言われて激励され、勇気づけられる。 (『不条理』一三八頁)</p>	<p>日本人であるが故の屈辱感を味わっているときに、「既にあなたは中国側の人間ですよ」という趣旨のことを言われて激励され勇気づけられると設定。 (上、一一八頁)</p>
<p>33 記憶喪失に関する解説を、五(六)文字下げて描写した。それを本で調べたとも書いた。</p>	<p>記憶喪失に関して、やや学問的に解説し、そのことを五文字下げて記載。 (『統』一三三〜一三三頁)</p> <p>記憶喪失に関し、原告は精神医学や脳生理学の本を読み漁ったと書いた。 (『統』二三四頁)</p>	<p>記憶喪失に関して、やや学問的に解説し、そのことを六文字下げて記載。 (中、二五四〜二五五頁)</p> <p>記憶喪失に関し、陸一心は「医学辞典」等の本を調べたと書いている。 (中、二五四頁)</p>

<p>34 書店で日本に關係した内容の本を見る中で、記憶を回復する。</p>	<p>記憶を回復するきつかを作るものの一つとして 〔<u>三四</u>〕 という特殊なものに焦点を絞った。見る内容…日本に關係したもの。特徴…人目を気にしながら。犯罪者のような心理。 〔「不条理」一三六〜一三七頁、文・下、二四〇頁〜二四五頁等〕</p>	<p>記憶を回復するきつかを作るものの一つとして 〔<u>三四</u>〕 という特殊なものを設定している。見る内容…日本に關係したもの。特徴…人目を憚りながら。犯罪者として密告されると設定。 〔中、二六五〜二六六頁等〕</p>
<p>35 「回復の過程を」によって描いた。</p>	<p>記憶回復の過程を 〔光の中〕に「青白い山」という幻覚によって描いた。 〔「続」一一一頁等、多数〕</p>	<p>記憶回復の過程を 〔光の中〕に「白い山」という幻覚によって描いている。 〔中、二六二頁等〕</p>
<p>36 記憶回復の瞬間を閃光のイメージで描写した。</p>	<p>記憶が回復する瞬間を描くのに「フラッシュバックのフィルムのような」という「閃光」を意味する特殊な視覚的な手段を設定した。 〔「不条理」一四一頁〕</p>	<p>記憶が回復する瞬間を描くのに「福妻のように」という「閃光」を意味する特殊な視覚的な手段を設定している。 〔下、九四頁等〕</p>
<p>37 人の名前の愛称から三六年前の記憶を想起する。思い出す相手は「お兄ちゃん」</p>	<p>「人の名前の愛称」である「音」から「<u>三六年前</u>」の記憶を甦らせる。思い出す相手は「お兄ちゃん」 〔「出口なき大地」八〇頁〕 〔野上…のがみ…ノガミ…〕 〔ノミ…ノミ…〕 〔即ち、前の呼称であるノガミではなく、ノミであった。〕 〔ノミのお兄ちゃん！〕 〔改めて、その呼称を確認し肯定〕 〔ノミのお兄ちゃんだ！〕 〔間違いない。〕 〔三十六年振りの再会だった。〕</p>	<p>「人の名前の愛称」である「音」から「<u>三六年前</u>」の記憶を甦らせる設定。思い出す相手は「兄ちゃん」としている。 〔下、一八九、一九〇頁〕 〔カウチャン、カウチャン、カウチャン〕 〔カウチャンではなくカッチャン〕 〔即ち、前の呼称であるカウチャンではなく、カッチャンであった。〕 〔そう、カッチャン！〕 〔改めて、その呼称を確認し肯定〕 〔カッチャンは、この私だよ、兄ちゃんだよ！〕 〔三十六年間積みも積もった〕</p>
<p>38 初めて見る日本を山とヌード写真によって描写した。</p>	<p>初めて見る日本を「山」と「ヌード写真」によって描写した。 〔「出口なき大地」十一〜十二頁〕</p>	<p>初めて見る日本を「山」と「ヌード写真」によって描写している。 〔中、二六〇〜二六五頁、〕</p>
<p>39 自分は侵略行為の</p>	<p>日本の侵略行為のために「日本鬼子！」と罵られ恥ずかしい思いで生きてき</p>	<p>日本の侵略行為のために「小日本鬼子！」と罵られ恥ずかしい思いで生きて</p>

<p>ために苦しんだと いうのに、日本人 は反省もせず尊大 であることに触れ 、主人公の消えな い傷跡を「まだ尾 をひいている」と 表現して描いた。</p>	<p>40 自らを大地によつ て産み育まれた者 であると位置づけ る。</p>
<p>たというのに、日本は日中友好が回復 した今、反省もせず 「尊大」 でさえあると述懐、その心の傷が 「いまだに尾をひき」 と吐露した。 （『出口なき大地』九十三頁の塊）</p>	<p>◆「この土地は私を産んだ愛着の地で あり、また私を死に追いやるうとし た恐怖の地でもある」と表現して、 死をも抱え込んで猶、最も深い意味 に於いて、自らを大地によって産み 育まれたものとして位置づけた。 『不条理』一三二頁。 ◆「命を育み、命を呑み込む、あの不 気味な生き物のような大地には、と てつもない寛容さと、とてつもない 厳しさとがあった」として「大地の 条理」と「大地の法則」を描き、 「無惨で残酷で、それでいて限りなく 温かい包容力を持つあの大地は、善 悪を選別しないで呑み込んでしまふ という、したたかな力を持っていた 」と描き、大地を「全てを包含する 生き物」として捉えた。 （『出口なき大地』二六〇頁） ◆「私はその地に産声を上げ、その地 に育ち、その地に生き、その地に葬 られようとした。愛しさと恐ろしさ の混在する大地。そこに私の過ぎ去 った日々がある。（中略）振り返つ て見ると、同じような大地が南へ南 へとどこまでも続く。そこには私の これからの日々がある。」として、 自らの命を大地によって産み育まれ たものであるという位置づけを引き 出し自分の全てがそこにあるとした 。その際、中国の北を代表する万里 の長城を用い、「枯れ草」とともに 「山の嶺々」 と表現した。 （『続』一七七―一七八頁）</p>
<p>きたというのに、日本は日中友好が回 復した今、反省もせず 「尊大」 でさえあると述懐、その心の傷が 「まだ尾を曳いている」 と吐露させている。 （上三六二―三六三頁の塊）</p>	<p>自らを「大地によって育まれた」と位 置づける設定にし、主人公に「大地の 子」と言わせている。 その際、中国の南を代表する長江を 用い、「一木一草」とともに 「河岸の峰々」 と表現している。 （下、四九二、四九三頁）</p>